

1890
1891
1892
1893
1894
1895
1896
1897
1898
1899
1900

去年はるをうり河内國を御陵ともを洋とちと起し
しふ甚しう熱^{アツ}き年を日下り之を并つき雨とつ中後ら
ねあつて若かりしにありて花のさるとりどあねきつても
ほろり疎せよなりしれどとそこの人ともありて大和國
ふとあつていふ今年ハさふふ潤ある年をそやふいもある
ふふなるにれとせら吹風もまふいとふむうて綿入をる
衣^{キヌ}もあきて家をせしむ十一歳よなれる太郎子あられ
かううさるむきそ断るなるうてねおるうはふらハ安政の



此四とせらるるをすむの十三日のゆふさうなりぬれは月の
光もいとあつた鴨川をわらうて何れの里よかのそのの
うせる人のもとにうまひはともうぬ

十四日天気いともし明もなうらうかのまに諸寺に出る
聖護院粟田などといふ里すぎても知恩寺に祇園やけり妙
法院宮の前をへて瀧尾社の北を伏見街道に出り此道
ハ都より大和よかよ大路なれハ大和大路ともふれれど
百のふららぎるし東福寺稻荷社なるの前をへて伏見

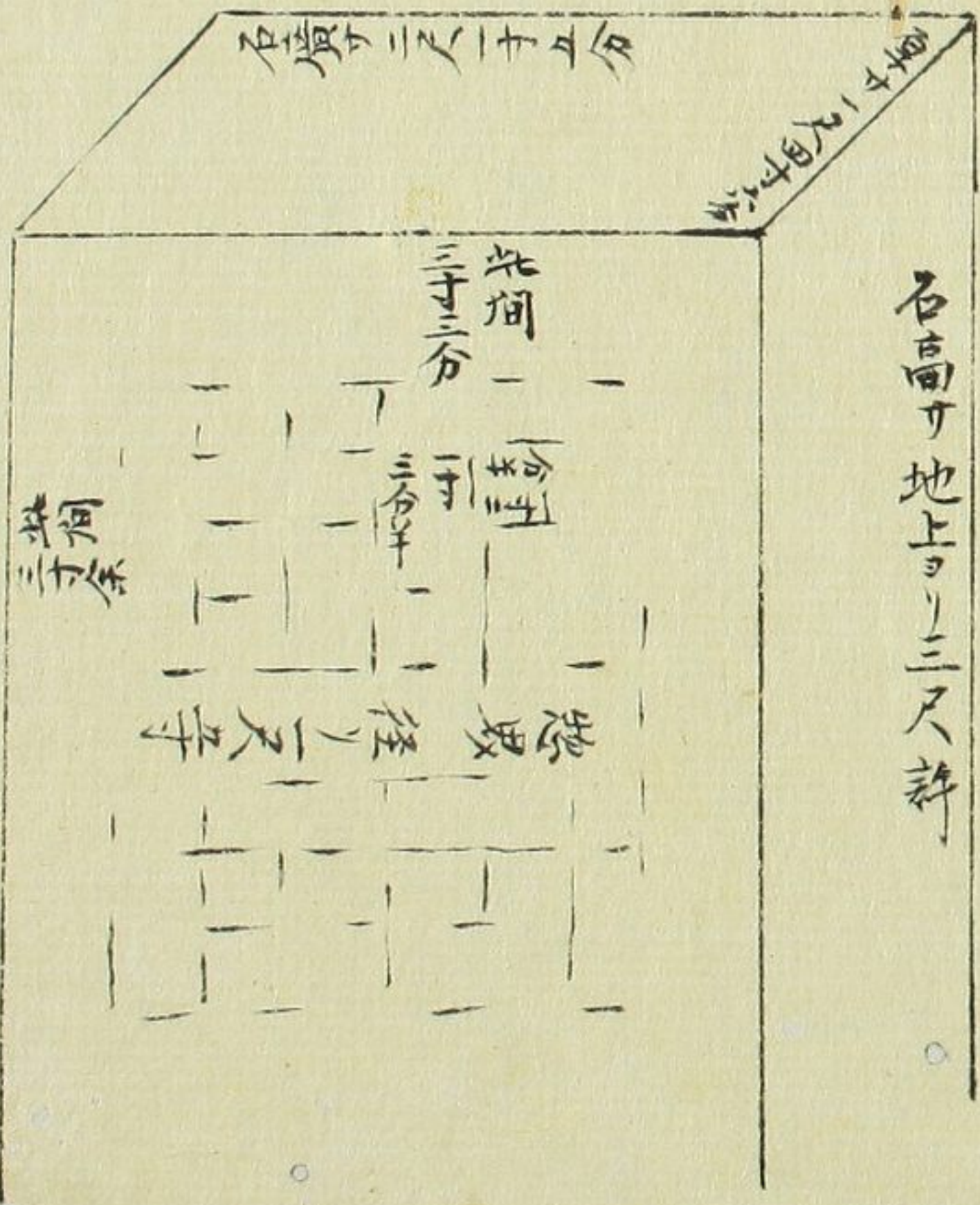
の町所香宮の東よりなほ南よゆりて豊後橋をこるこ
の橋いとひろく長しとるをわらぬハ向嶋なり右へまわて
巨オクラ掠堤よゆくよゆり堤をゆりびりて巨掠の池を舟より
そゆく池のおとてよはふみきふんなど云ふ水鳥どもあ
らむれをそくなくなり伏見北城山をうしろとつ三町を
とよふ所よつきぬ名も似ず家多うを舟よりあつて歩より
ゆくさやう好橋をこるて巨掠村らちれ丸を春日明神
とておそくまはハ巨掠神社なりとを羽拍子ハビヤウシ廣野新田平

川村などすきて久世ふきぬ鷺坂はいつくもあらむ車家
假家青家菅家などいふ古家ゆく道のらぎりひるもよ
りり車つらはいと大きぬつうなり寺田をすきて長池と
いふ里をかれ飯ふ奈嶋十六高茶屋王水町家立つど
きりり町を出はなれて玉川といふ小川をさぐる綾松いと
あやしふ里の名なりや平尾をすきて敷やぶのらぎり
所を木津川をさぐるなりなりやびてなわ川をひい
拍堤をゆく光明山は左のうらぎり近ういふ祝園森は右のう

た川をへがら遠く足ゆ今ゆく向む拍のさきとんやら
れいれども麦の葉よの青きとらそ瓦作れる畠をなしゆき
くて木津の渡近うなれい泉橋寺の石地花此御がし木立はえ
こぬよかづくといふ泉の大橋はよららるやかろけむ泉川
を舟とらる今い木津川と花ふなる所をさぐるて木津の大
路村町屋まつけり持山はよ東にひし久遠の都もこの地
よそをひらむゆきして一の坂村あり山道を登りて
高座峠といふ所山城大和の國界なりと花界をすぐる

八奈良坂村より道の右りに善城寺春日社あり小社三社
 東向に立ち入り社傳に中なるハ奈良津彦神社北方な
 るハ田原天皇志貴親王南方なるハ武雷命を春日山より移奈
 りるなりといふ社の北旁に箱石といふ石立ち其の石此さ
 ら方よりて箱石似しバさふよぶなりなり其石の高さ
 地上より三尺をこり廣き二尺一寸五分厚さ一尺四寸六分
 寸かく度ゆるす天を皆いまの石の面一彫れる文字ありとい
 尼此れと石膚いづく荒ていゝある文字ともんるるうん

縦横二界の筋つづき今つづき見とめらるるま惣界の
 横の徑一尺五寸むらう縦此より幾許とも知りしし一字
 此界縦も横も一寸二分半許
 此れハ凡界の行数
 十二行許ハあり
 ありべくんを
 此れとならぬ造りよは
 見定めししその形状
 大よそかくのごとし石
 此膚いづく荒損ねて
 きづらふかかひれと



石質細く美しかるべし見えりそのもこの宮石をかくらうさふまをさぶする故に既に松下秀明藤貞幹等の東大寺要録に據考へて元明天皇此御陵の碑石ぞと述へる説ともあれは年ごういと見まはしうそのもと在所も委しう聞よほしう思ひしうつるを令かくまて目に見得つることのいとう此の後の考れ多よりともせよほしうてなむきてもこの石れと在し所は何處るらむとふとよま合ひしう翁に問へむ此所より四町をり

り西の山ヨウウウが峯として天子を火葬し奉りしと云傳ふ山に在しをいつの頃か峯づつれて其南の谷に落ちて久しくはらばいと畏おしとてらの社地へ移しおとしと聞傳へ侍るその落ちて在し谷に墾きして田となし侍るが今も字をハッ石と申し侍りその移してをうし年月をいふ某え知り侍らば古跡尋ねるふならばこの地内の北方にヤハタ家とも石神とも申し石を侍りといつといぬ日ハまご高れど足ハゆきつれはハまご明日

我として此所をいづ般若寺の前笠そとばなとを
すきて千本坂をくぐり北山十八間戸と標しける長
屋を道のたもとをりして佐保川に橋をりける人家之
つきりけり川もいと狭くて今ハ千鳥なるきげも
あり此所よりや奈良此所なるへきすくしゆきて
東大寺此佐保路門のまへチカイ輾磴所の旅宿と考く収
ハ申のさびくちをへし

十五日より西ふりけり上司許申むとて宿をいづ
船いと早々にハまゝなり驚かむもふなりとて佐保路
門を入ると人ハ景清門とよみあざなをつてよぶり
いと古きしむ門をひる鹿あまゝむれりさぬ糸よ目
たれぬいとそいとりづらし床高う大きぬアセクラ校倉ゆくて
此倉ミツクラと名し負へる倉なるし聖武天皇の
御物より始りてそのかみの器杖藥品文書なりとくれと古
くゆしき物あり納りしる倉なりと勅封とてや
てよたなることなるぬぞいとかるし北や南に折て廻廊

此殿門より了ひて御堂よりまゐれハ盧舎那はとけ此
金釘の坐像いと大きくて后より東のうゝに石階を高く
登りて二月堂とてハ觀世音のねりハまハ堂高北所を
北をうら見えうらうらと南よりまゐりてきりり少を
これハ遠れとてハいさす階を下りて若杖井三月堂な
とすきて南よりゆけば東大寺八幡宮西のうゝに新造屋敷
倉などありあり南より若草山の麓をへてより北河を渡
れハ南の岸より水屋社なるハまハ春日山松の木の間隙ヒマ

なる寺なる馬酔木アヒヒ此花白うさあり春日社もあきて
まゝ南より若宮北ハ所社など立々小道のほいてこれハあま
南に高畠より出て大和守光美ゆりの富田此家を訪らふ
酒多にこれと饗アヒヒのうらう古記文書や何やとんせらる
る時々に末の牧もさめれハこの上司がと今日え糸らぬよ
し使へといふハこの家ありしよともなきて開化天皇の
御陵をておと中條良花をて訪むとて高畠を西へ出て
いさ川を北へうらう兵福寺の南門まへ猿沢北北つらとて

林小路を北よりき漢国社の南に念仏寺の門を入る本堂
北西のこゝに雑人の墓碑ども立双へるといふれ率川坂
上、陵ありと我墓らの中、西東三間北南四石をうりサし
高くて木ども生ひしをいと少さくは居しなれハれもごら
目ぢりうを居りぐるにいと大なる陵も我墓とも
はるな御陵の上、ちるは地をけるいとかりとといふも
おろろろろしその山陵のうら甚く荒損れなれと
御在所内、前の方を辰巳に向へり御陵の西方南

方地形むく周廻小堀のあと残して見申今御陵とさるる
所ハ御在所の上と墓地に引ならぬ坂又高くとし所ハさ
はるは憚りて平さんありにむむ城次とふめぐる城跡と
見て今の如く少さく形うしなるとし前の方形も
皆むき平して今ハ麦畠となせり此山陵のすへての根廻
り三百間をうるといふあらむさてその北なる小路を油
坂町といひ西なるすら坂西の坂といふ今も地形高低
ありて坂といふへき形勢あり率川ハ是より四町はる

南を流ると云ふより北東よりきて奈良奉行所の
前形の中條の宅よりして出逢えて山陵のふと
何れと云ふる言ふ此と云ふと向へはそとのおの書よ
む順て侍りし瀧長我玄鶴翁のいさう考をこそ
てかの石面の摺り板に彫らせられしに侍りし
とて書櫃の底まで尋ねられしと見出侍らぬ
ハ後よとてやまれしといふを又その元明天皇
此御陵をヨウウガ峰よりウハナベに遷しと云ふと

いつの頃とも古書よんを侍らで知られぬと云ふ
れなとかさるるハ元禄に推充^{オシアテ}られしウハナベ城
と云ふ此帝此御陵ぞと思ふとられしに云ふと統紀
なる御遺勅をいふに見すべし又御陵の事
よつたて古き換地帳を見侍りしに法蓮村に佐保殿村^{サホ}
と法華寺村との間の田地の字に兩多利と書けるを見え
侍る宇奈太理社に舊跡を侍る(社)と社ハ廢れて
今ハ字の残り侍る又この頃借得侍るあれ見ると

て出さるるハ大安寺縁起并流記資財帳と題せる百
卷子（三キモノ）あり天平十六年七年等の三綱此連署ありて
大安寺印といふ文字ある朱印をむまなく捺（モ）り
筆跡いと美（ウレ）くし鄭（ウレ）りりまうなひてひるじせらるるほ
と夕（ト）れもなうぬれハ眉間寺のことか（カ）らひれきて
かへりぬ押上町を先美（ミ）よりわかれて中御門町に森
若狭がりまよして呉服尺鯨尺かね（シ）し文尺（ミ）をと求
りて輾（テン）磴（テン）此旅宿（リ）のかへるふ日ぬとみ雨（アメ）をれを

十六日けし雨ふらぬ飲食（ケ）すべて上司此もとたゆくは
るト安藝守延絃主いであるまづ昨日のお（シ）り（シ）をれい
ふ此主にいさなをれて東大寺八幡宮の宝（タカラ）なる古器物を
る（シ）ち（シ）く官（ツカサ）此傍（ワタリ）なる技倉（テクラ）あけ様（サマ）生（ナマ）ていふ此ハ（シ）
まに登りて見る古（コ）此樂器古（コ）き假面（オモテ）なといと多（オホ）くも
裏（ウラ）に書つけしる年号のさ（サ）なるら存（ゾク）れるといとめ下（シ）し
赤草（アカクサ）此帶（オビ）鍔（ヤ）子（コ）さして腰（ウシ）にむ（ム）るなと今の世（ヨ）此石帶（イシオビ）と
ハ甚（オホ）く吳（ミ）なり赤皮（アカカ）の靴（カズ）も色（イロ）めつらし古（コ）此鞍（イサナ）きつけ壺

鐙ハ内木地にて赤塗よりなるが多し丸木弓竹胡録
と云ふ状^{さま}りてし葱花輦儀仗の矛太刀何れと百
様なるもの多う午の杖も又ともなをれて上
司の家より昼食^{ヒルケ}とくまふ酒何れとて
おぼくして此家の氏文紀氏系圖一卷を出さる觀應二年の
かな曆そのころの消息なるの背^{ウラ}に書きし此家の系^{スチ}の
ならびすべて此紀氏の分脈をいも委しくかきていと
よ此氏文ありたり又此主此父なりし延寅主の墓^{ツツ}しお

かれきる勅封倉此器物の圖文書の影写をとあましく見
せらるる^{フシナマンカクナ}二枝カ子らんを袋十五寸の木尺十寸の才尺
瑠尺なるの摹形をとるみな正倉なる御物の摹しなり
も此尺なるの二尺ハ今世のうねりの九寸八分ありて
一尺五分短し此百尺ハ既^ハく穂井田忠友此摹形に
據りておのれも摹し持しを先^ツ年此火よりな焼
うせりしを未時をう^う輓磴に歸りてまゝ古市に
ゆく北浦儀助定政まちあひうけりて昨^{キナ}富田の許より

て便侍りし今朝より待まふけ侍ふはとて酒を
さつれものしてアヒ食す君はまうけよ今日惣へふ多社
よおそし安麻呂朝臣此木像をさるゆふうととの
てからうしして字し得侍りしあうとよふをこれハ烏帽子
小直衣ゆくものきて坐しきる像なり帯むすひまれく
るさまの古うと見ゆれとその顔かカホしらつきようむげよ令
りききる六字しふぬのあしきけよもとの木像の古うら
ぬけまゆりてふしとふ思むなされぬをいしともいむま

てよき御像よ侍りなといらてあむさふくあのが百事記
を信するふと成るやう聞知して此館屋のうかしたくも
惣まうし志のほとはいとうけ並とうかすつ何れと
きうかする中よ八嶋陵ハの百市より十二町をる南のう
よて崇道天皇御霊社と申ひがすなるら御廟よて別よ築
まける山陵ハ侍らひ此御社此内よ祭れるとさる古き御
輿二基よておくしまひその一基ハ空輿一基ハ御太刀と御
らと納り侍ると亦是ハ昔より知る人となくて侍り

を近頃かの御社の神主とむらゐの男は、その神室を賣
出し侍が猶よれ價とあるへきものもぞいと畏かしこくも
此御輿れうちまて搜りもとめてその御太刀をも賣むと
一侍り考るをもくと聞つけてもよのこくをさめさせ考ら
よの侍り一具をり其をのこかうぐう一一人此委し
う聞きくう一趣を承りてかう知られ侍るふつふて
定政はりし思ひよりふふれ淡路国より御骨をのせ
奉りて八嶋に振奉りし時の御輿をさるう御ミ冥ミ冥ミ

のこくふいほき祭りのの如くくたひいりたれ
ゆるきて八嶋寺の跡ハその御社の北方八嶋村と藤原村との
畧して大門をとりあがれ藤原村の田地に存り侍るなりと
おきくほとに火ともし夕食ウケまのなむるどひ夜になりてこ
へるともり存を飯合川能登川なりとりて東のうこ
たふれハ曇りのち妙の月乃の月乃の高園山春日山の
はうふえもり以え奥寺此塔の前を経てかいかへた
成の事なるなり

十七日そのらいとよく晴く朝よく梅坊よりゆく善壽の翁
出らひてうらななくかゝらる開化天皇此御陵の北なる油坂
町といふ今も少しの坂も此傳り此坂もとの名ハ府坂と申
して近來府の領地なりしを山崎より油賣いできし頃あり
よも油賣どもいきてきて此坂より住つたころより油
坂町といふ傳りしを此御陵より五町をるを南より西城戸^{ミジヤウト}
町より惣年寄清水源兵衛此宅の傳りしを率川阿波社の跡そ
の南のすぢより馬場町よりハその社此馬場の跡より傳り城

戸といふ名ハ城外の意にて平城京の東北城外より傳りしを
まゝ永祿のころ松永久秀此作りて住れしを多門城
ハ天止り廢れてその跡今も多門山といふ此城此谷より
殿の二王門の扉を取て橋よかけきりしを寛永のころ東大
寺より運む返して今も彼寺より傳りて光明皇后此陵
いまでも肩相寺此西より傳れどそのあゝぬものにて實此
陵ハかの多門城に築きし山のうちにて既に其時凶せ
傳りしと兼りしを不退寺の庭より傳りて手水鉢ハその

辺より堀出てくる石棺なりよし 岡伎(伝)るまの坊門考と
いふ書一冊有りそのもと享保頃の人にかき起して有り
しを甯瑞といひ一人は寛政のころ書との(一)よりとの
に傳りある南郡なる町の古事なり其集め記しきる
ものより又奥福寺の成身院に合運図と有り書七卷
なるも傳りし地は朝廷此年代と奥福寺の曆教との連
を合せて歴年此事校記しとのより傳るを今ハ成身院
に在りや無しやとふ知り傳らばなとかつらうは

と旅宿より人きうして富田の君眉間寺よりともいふを
とてふよりきて待たりとくといひ傳げハなと聞あ
るはべきこともいふはとふ必そこの寺より傳る言
をいふしこれのよめかゝて其翁の令とくしとやめら
るはとつれなり辭びてすべりいであまのくも訪らそ
むとて其思ひしこと事止げく行ききくも心いられて
えとはさあうゆるらちをてふに歸すそれら連立て
眉間寺よりく己の取をうりぬるし此佐保路門の前を西

又五六町ゆゑ佐保川のほとりより佐保天神北社川岸
又小さくしてまゝこの川を北に多門をまゝして板橋あり
その西にかけたる石橋を北へまゝに眉間寺の惣門あり
奥より入てすらし登れば本堂多宝塔るといふ堂乃
北後の築垣に唐門あり御陵にまゝなる門ありし本堂
北庇に入て暫し休らふと童いできて築垣の腋戸
おしあけて道むくまゝふし登れば南向て鳥井立
りその奥に圓く高く茂れるところ聖武天皇の佐保

山南陵あり鳥井のまゝにめぐつておむ北をさめる陵
の四周に五間ありと井ありてそのまゝ見あり
るよ北山陵の作り女例の陵制ありありてまゝ山の腹に
まゝむらゝつてその上に御在所を圓く築垣しその
まゝし東のまゝの方よりから堀の残れるがぶとる形あり
るよあり後院まゝ向ひし御陵の頂を上げて大石四つ
置かれて作りといへり寺の坊舎は御陵の南下の山腹を
かき立て建せり寺へまゝして太子殿の庇を休らふ山腹

また南に障りともなはずとて入るる一とよし御堂
寺といふ名のちりもげふさ致しとありし茶屋と
くいものなる物にて院主出ある北御寺ハハ頃より
う世所と主伝くと向へハハの陵のいできせりし頃よりな
へあふまゝとくふハ例のなるも什物どもさう出
てせらるるまづ聖武天皇の御影いと古く殊勝なり給
まて鏡臺のハ稜鏡をうけておむらひ多る御像なり
縮みくちれ損ねてよくせん粉もなりぬし四聖

此図とよし大掛との四聖とハ聖武天皇婆羅門僧正行
基良亦とあらうて画きしる図なり上り色紙形四枚を押
て四句の文をかたり其文ハ文章博士菅原長衡朝臣の作
なりて書ハ東南院二品法親王尊領かき多し画ハ美濃法橋
観感此かきしるるるる聖武天皇講式一卷奥書ハ北本
願講式為眉間寺常住物申入東南院二品法親王之間奉
所被添御筆也更不可出寺外者也康暦元年 歳次 巳未 五月
二日佛子頼慶とあり伏見院宸筆の往生講私記かなまのとのあり

一卷奥書ニ德治三年二月廿一日書一とありそむせりし御書
いとくはし 聖武天皇宸筆の最勝王經十卷ありきも
のちれも 聖武此所書ニハ何れも又古き消息七
通のなるも後考ももとして字一おきあるとありとさの
ハとて漏一乃光明皇后此陵淡海云の墓なりともあり
まほしとて弟子僧を召さるべしとてひてゆく此寺の
方丈の庭をへて小徑をたつてひて西のうへ一軒ありとゆき
て一つの山乃頂ニ登り頂ニ老松九株生ひたりふれ光明皇

後の陵なりと我この松のともより 聖武の御陵ハ卯辰の
方よりゆ淡海云の墓ハ申のうへにともより此処古冢あり
ハありとれと甚く損なりしも陵墓のうへちんを
いふこの皇后の御陵ハ佐保東陵と延長の式もともより
北ハ聖武の御陵より東ニ在るきなれハ善壽の冢なり
云ひ一とく多門山のうへにそ在りけらしとのなる下り
てまゝ三百歩許ありゆきて又むつつの山ニ登り頂ニ老松
五株ありとれ淡海云の御墓なりとそ此冢と甚く損なり

その形を以て此のともより皇后陵の寅のうへに七
足狐とよめる山の稻荷の小社を以て北方に
院といふ尼寺成のうの田つらと近く
り他北方の谷を以て近く
が家のよりこれ法蓮北領内なり
また肩を以て太子殿より直南に
とそものより下りて北山す
池乃めぐるを北の谷の田と山す

て七足狐の山頂に登るあり
てかのより僧を以て光美主と
の上なる稻荷社に淡海公墓より
より登れる例の鳥井あり
例なきことなるし頂なる稻荷北
りよ土堀を築めらしむる北社
仰例にしてありその北又一長短
まゝ短きが一つ合せて狐石三つ

そのもとせう有しふやその社の右左に立る二石ハ石面いしく
荒て彫りきる像さぶらうなる以南に例れらるるその像明らう
より争れハ蠟墨とてあて摺りうつハ其像のしげがら二尺七
寸像より上北とふ字をて彫らる石の長さ三尺六寸ありし
りしその像をうつりしうふ頭をそ瓶とも大ともあれ身ハ
人のさぬしれハ緘し先達の説のこく隼人の犬の面を装む
しる像すてむし狗人といひしものさぬこそしるた也
聖武の御陵ハむき山をへがし己の方よりえ光明皇后の御

陵ハ午の方よりえ是より尾つひし西北の山にゆけハ又
稻荷社あり此所も土塚を築めらして社ハ辰のう向に立
しり社のまへに斜め山あり此ハ奈良坂より法華寺村
へゆき関所ありとそ此塚をすし西にゆきて及二うに
かき所もたむらうと彫きり立石あり右にゆけハ法華寺
村へ出るなり是より申酉のうはくくと廣く平らなる山
の原にて今ハ桃林となれり花ありとていとうそし此は
乃を桃林此土塚よりして二町ばう南にゆきて土塚のふ

つ所乃のみぎうたの亭にダイユクガ石とて大石はつ七ツ石とも
云といハバおどろむをかきよけてあつた尋めくよ七つハなうて
五つあり乃のたよニツ右よ三つ北ありやすべて大ユクガヒラと
いふ又ダイユクガ芝ともいふハかく柘畠よも祭^{ヒラ}いハ芝生そあ
たふとしらひぶの名よとやあをけめあつらハ砂山よそ石出ツベキ
所よとひらさるるをかる石ども集あつハ古冢のいづく祭^{アヒ}け
てかくハなれりー、北近きよりー、在ー古冢をほむ死て石
のいづく轉^{コロ}いーとせきつる大和志よいー、大皇后尾ハあつの

こく七足狐とを混^{マキ}らかしうげる、雍良ノ峯も近きあつる
形^{カタ}くまを向合す、きく人きく逢れ、すぶなうて北はと見え
うろし菅石をも今一ふ見うてらぬの奈良坂よ出むとい
たふの立石の所よもどうて七足狐の前より東よゆきゆく
奈良坂近うなりて人あへりヨウノミネとゞ北の峯ぞと向
ハ頭うちうまよけて跡よりくる為よとひて、いむとくふこ
翁来ひいてさうふハえあう侍らぬヨウラウガムネと中次山を
菅石の北よハ侍れといふおいそのヨウラウガムネ上菅石といふ一所止

も教へてトトツバかりおとせとてゆく午時といふくかぶぬ
れを大夫まはりより帰られぬおのれらの薨まゝとてひておの
れをとりて北東へ谷をふれハ谷はひよ田あり北田と北の山
すそとの間北を四丁とて西へゆきて北の山より南の田へ
まゝと出るふ流あり小ふ橋あり薨まゝとて北小流より東
のこゝより田は字をハコイシと申し流より西へ低き田の字を
西谷と申しこの北なる山をヨウラウガムネと申ししてむう
天子を火葬し一かひ一所有と申し侍(侍り)のらるる

北^{ハネ}峯とて管石まろひ落て北谷よりく侍り今
も北^{ハネ}峯をハコイシと申し侍り北宮石ハ天子の御墓北石
より侍りかゝる谷底に埋もれをてむといと恐^{ホシ}ありとて北
東なる奈良坂の春日社の旁へ移しまゝと兼り侍り又お
のヨウラウガ^{ハネ}峯も北十年はづるとあるとて祭られて畠とな
し侍りて今ハ麦の葉のこを青くと茂りて侍り又この西の山
に兵賊天比森とて築くとあり侍りといふまゝに在り北薨
よりとてひて山をその尾を百六十歩をとり侍り北の山は

くなくとも高くなくして西へ連れり低き所を北へ登るふ

徑もありなほ山すそ城二百歩許西へひききて翁まゝくま道

押井堂霄瑞ノ南都街坊事跡考ニ云

りて北なる山の上を指さしてあの松乃茂れる所が女文天の

奈良坂所——百事記葬皇后於那羅山

森に作り此森此女財天も奈良坂へ遷して今春日社地

この陵地乾方村外上町余ニあり

菅石の東方におくまは此森ハ西東三十間北南八間をこ

オ天山より山の種案ニ云オ天山ヲ磐之媛

平らに作り今も崇りて人の怖るまゝ御墓の跡な

皇后の陵ニ元々ありと云ふと百陵ナリ

りとも作りなるといひてなほ西のうへにゆけばわづれ

1ノ旁松トハスヘシコノオオ山ノ1別ニ考

てととのなを帰るヨウウウカ峯の麓より南の山をこれハ

大コクガヒラの稲荷社末の方より申此雍良峯より登り

て足まほしけれと腹も影もかきふき中此ふらいられて猶

山すそのなをかへる東へゆきつて左のうへへ登ればすれ

はら春日社の森此うへより出ぬ菅石をまゝ委しうん

て社の前なる家に入りて何れと伺きくまら此大コクガ平の又

西もホウラク家と申す作りなほ奈良坂より十八所はうり作

ると不足く見えはしうなくして急ぎて輓磴に帰る時ハ

未の終なるし昼食をうべて大史主と諸ともに又持くかの

ホウラク冢ウハナベホナベをんむとありたりそもかう此を
を狂^れりたまたえんまけりうひるこふ元明元正二帝此御陵
りぬ冢家を推あて実乃御陵の失せそそんといひることの
かしく悲しくれハなりけきと渡りし佐保川の石橋を又こ
いふて眉間寺惣門の東旁なる小徑を北へ入る聖武御陵の
山の東麓を北へゆくは冢の東乃山上冢のまじりたるもの見ゆけ
らるゆゑかろるるなるハ北乃方より登りてさふ形ハいそ
荒れしと頂の窪くさぬなとまことに冢ありたり聖武

の御陵ハ左ツ隔て西の峯に近うぬいり此冢とまじり
との小山此峯に在りて老松七株雑木なると生しく南の尾
さだハ平らふさし東ハ低くなると多門山の城跡近う続き
きり光明皇后の佐保山東陵ハはらさるるまゝ来てはよく
考ふべきとあるそあるもの冢を北へゆきてけさし
足抵の前より登りて大コクサヒラ形なる立石より登りて
うへて右のうにゆく呼子鳥ハなりぬともきづきとも
らぬ山中ハとれぼつとなりてきどろそゆく奈良坂より

十八丁と云きつれと令ハ一里と成つらむむなと云ひなうらうら
ハなうらぬ及なれハハ幸うして田ある所ニきぬ人里近
うなりし形をへし此あるを此山ニハみな砂山のほごう山とて
木茂き所ハいとほく此田をへふと南の山ニ松一と生し此
峯也ハの奈良坂とてをへつるホウラク家なるへく思もるれ
ハ畔をへつて南の峯ニ登りつるハ例のさぬを頂くばみする
いと廣う浅う窪とてその中より一とと松ハ生しるなるあり
この松ハ古かといと大きともあらハ名を知らぬ木一とと

松ニそいて生しる山頂ニ圓く作りし墓あるへし家のめく
り此上中ニ壺の破きしものいまもくもめりしみな善田陵の堀此
めくり此土中より顯くれてあると同一さぬのものト并にあら
かく廻りし壺を埋しる築さぬの古きよほをせてハいとくも大
きからハ前の形もくもなくきく圓くの作りし越ニ據考ある
ニ大山守皇子の那羅山墓ももやほくまなとおもひをされ
つ此山よりウハナベユナベ西のこくに近う見ゆる田の畔^{アヤ}づ
ひと及し出て山路を出るなるハバウハナベいと大きうて立り

前^カ方^カの後^カ方^カくめ^カりの堀も水の心ひろくしてサメ^カれ
己^カの陵山の根廻り三百四十六間ありとそ北西に双^カしてコナ^カべ
も大き^カなる冢山も其形ウハナベも同^カく堀もひろくとも
く^カり^カ圓^カなるこの頂^カ奈^カヶ^カ長ハ尺五寸許の石頭北陵山の根
廻り三百四間ありとそ北ウハナベも元明天皇の陵コナ^カベ^カ元
正天皇の陵に當^カり^カる^カ此^カの^カ改^カり^カ延喜式にも奈保山の
東西陵と載^カれ^カる^カ北^カの^カ山^カも^カあ^カら^カず^カ且^カあ^カつ^カき
て^カ双^カり^カれ^カの^カ延喜式なる北城も合^カる^カる^カを^カや^カウ^カハ^カナ

べとコナへの間の丘を北へ出れハヒシヤゲとよふ大家あり
御在所圓く前ハ方^カま^カて^カめ^カぐ^カに堀二重ありその外堀と
中の堀との間北堤の土中に壺つらなりて埋もれてある陵
山北根廻り三百八十一間圓きこの頂^カり^カる^カ三間許窪^カなり
とそ北冢を平城帝の揚梅陵に充^カち^カる^カ當^カら^カハ^カ磐^カ之^カ媛^カ命
の平城坂上墓ならむと云へる秀実の考へる當^カり^カき^カ北^カに
く^カり^カ北^カへ^カの^カづ^カり^カ地高くありて坂ともいひつへき
勢あり北ヒシヤゲの東をめぐりて北より西にゆきて歌姫

乃こ出れバ日ハ暮るてしう共さうハ陵多る所なるを日
これこれバいっハせむ共ほるとるむ輾磴と
歸らまるところハ南よりきてコケ茶屋といふ所さぬ休^{ナス}
らひて茶をとのむ^{サヒ}主のちのふ出きをれハ共さうのこも共
く物さういとははれる男と何れとくる共所をコケ茶屋
とすいハ文字も公家茶屋とかき侍りて奈良の都のこ
ろハ共さうハ公家さぬの宮殿多かり一所は侍れハ公家跡の
茶屋とハ以意まて侍りたるとふそのけしき色サもりて

心も妙くマテガイも程近しときけハ共さぬ歸らむとて
東南に法華寺村よ出て東より葎枕川いまハ共も川と
云ふ川の北つら城きさゆきまゆハ共さぬ東の山より
うらみ共さぬ火けなまもりてむむ輾磴とて見てふの
火を尋めれハ二月堂の觀世音の縁日ハ御ありしなり
とす

十八日ハすさハ曇りハれと雨さけもりハれハ東
田原なる光仁天皇ハ陵とて立つハ大仏殿の南大門春

日社比車宿なるを越えて林のなすを南よいで高島林
へて白毫寺村より高圓山への東より鹿野苑より伊勢
乃此山路へ入るのぼりして鉢伏村よりさうに人家三
四ありありより嶮に足登りてゆきゆく右側東金
剛坊の跡として石地花あり人すむ家も三軒あり
須山村の地
出戸なり
さうよりるゆきより東まで二にわかれり左
畑天王と彫きる立石あり右へゆけば伊勢及び宮まうで
の藤人ゆき多し此は僕もトコバウノ辻といふ田原陵のあ
り須山をよへハ左のよりゆくべきは狼石より見
まはして右のよりゆく三所許ゆきて夫田原村と須
山村との領界なるのほころの土中より大きなる石あら
るれよりものさへする長さ二十五歩廣さ六歩高さ一尺
ちよりあり此大石はまのこの小石を合してさうさう
抜うせしる跟のくしみ狼の足跡に似しよりして狼石
とよよとなむ大和志に此オホカメ石をさうさうが石と
さうなりて田原西陵の拜石ぞといふ近ぶらけり書

よハ此所ノ古墳ありときハかきまされハ誠ニヤカラむと
思ひて今きてんふふの石より北ハな山田ニて古冢
と疑ふべきものきよんえんさとの来る城まらて此
ありて古き冢ハ有なむやと問ハばあつらよハさるもの傳
らば東田原ノ王が冢と申て傳りていふにいなそれハ
あらで君がヒラこいふ所ハなれかともハそハあつらハ山
を隔てて八町をり北ニ傳りていふされハ此ありてハ
古墳もななく君が平ハさむかひ遠々れハあつら拜石ありて
くもぢらぬがうハ此狼石ハ切ならしきる石もあつら
その形おのづから凸凹ありて石の膚もほらくと苛^{イラ}ま
ハ^サ坐て額^{スガ}づくぬくもあらぬちも狼石も踏と傳り
て東ニゆきて矢田原の八段田といふ所ニて休む王が
冢への及なむ向きてゆくあつら伊勢及をりて
和田などいふ村をすまてコノ世川をりてハ此瀬^{コノセ}村
り及のたり人家の北の田中ニ枯きる松の木いちま
立てそのととに雜木生ひる^{マロキ}内^{ウチ}家ありと人王が冢

とよふおれ光仁天皇の田原東陵なりと北田の畔をつ
ついで北きそおもむ家北東のすそをこ小川流北なり北川
の名ハ何と云ふと柴荷へるをものうと向へハ赤坂のうとよ
耳尻きしれハ赤坂川と云ふとさきまうと云ふ北川の氷あけよ
や大なる岩を北陵のすそ北き築入きり西南のすそをよめり
てこれハ石にまう積をぬり北石ハと向ふ北すその田地
の底より堀出へり北きと云ふ今あめ御陵北免がう北き
の業人てめがらすうに二百十二歩北きと云ふ又あめ御
陵のちりハ東田原の日笠村の領りてあめ北瀬村の地ハ
北ら北の陵のうとある松八十年をかくきたに枯れて北
りてなとかう北瀬村の茶店よすらひてかへるゆき
て須山村よきぬ春日山の石切峠へ出る北より北へり北
て熊の路を山すその原へ入る北きを君う平と云ふこの熊
路の北旁よりけ高き松の枯木杉むらの中よきてり是
を君様きさまが松とよふ枯松のもともて分きてるに陵墓
のかさちもななく路よりハ低き所よ小杉植めらしき

たうたにのみ枯木の生ひきるるありたり里人を君さんの御
冢なれはのみ松枯きれとも切らひなるといふ多う志貴親
王の田原西陵より當れりや當らぬやと云はつる此より
ハハハ田原脚のうちより是をちきつてハ百き冢とあら
はとなむともとの及へりとうてたのころへ東金剛坊の北
いづけき登りしをを下りて鉢伏村までかれ飯くふ未の時
ころろぬくし鹿野苑よりなる西より下りて百市より北
百市より出むとゆる山すそより古冢いとあまきしを百市の
町を南にいで藤原村をへて八嶋村に至る人家のほろ
たの東南より崇道天皇社あり前より拜殿もほろよの御
社今ハ南面より立ちくともいふハ西むきありしと左
む崇道天皇とよみ額御社と懸けり社地の南より池あり
東北のころハ廣た林まで古樹生茂れりこの林中にも陵
とおもはるるものなるハ社の下もきり平地まで陵とハ
なるハ御社の西旁より八嶋寺とよみ小庵あれども百の
八嶋寺は跡ハ藤原村は田の字より大門堂前をとよみ名

残りきりわたりなりと巻山の巻は入て物なと向ふ僧此
ふやう北巻の西まゝなる家ハあの御社よつきてハ古く申
うまひる家よそ北社地の古図の大起なる故秘藏傳り
さまにはのん一とも傳一御社の伝を所令とい異物と
一やうと覺を傳るなどふいとんまほこれハ其繪圖
んんべんはうひてん十といハはうし頭を抄してえ
せ僧がゆさん一ふなつくよ用む傳りし主達直ものし
めそんを奉るともや傳らむこふんすべもおもこれ

ぬども一やと試かてら彼家一ぶわてまうくといをせ
ふんバ目もこんん耳も聞をうてにきしれけなる公翁
きうこりかきをるてふいその繪圖をよはと親し
たやうらの祥へ預け傳りてあふ傳らぬいふ南よ
ゆけハやうて山村圓照寺宮北惣門の前よつ北を門の
西南の旁よ百家ありあとと東南よ山間よ入れハ今よ
むこりい新地あり北地の北をつりて東よゆけハ北
行及の南旁よ大きからぬ圓家五つ双をり二つハ南の

入口ちりけて石室の中へ這入へしと人五家とよふ月照
寺官の南なりと山すれちると帰りて西の田面をみる
其遙く西へベニシヨ家サレ北へ丸山といふ家小さく名
もなき家なりとてふりともとのるを北へかへり東の山麓

圓照寺なり北方
宗及天皇なり南 古家ニツニツとてり大和志と宗道

天皇の八嶋陵を山村に在といへるハ何れも古家をさせる
よふいとればつゝ此へ今おもふまハ八嶋陵に當りて思ふ
る家ハあり猶八嶋村藤原村より此に在る古市を

とすぎて奈良に輾磴に帰へる今夜よりのより雨いり

南都新坊事跡考北法蓮所按るに法蓮法師居住の地奥福寺別院ニヤアリケラニ里俗云此地旧名廣
岡之故今廣岡氏の人多し

十九日雨より風より朝より輾磴の旅宿を立出て西方へ
ゆく眉間寺の前へて佐保川をより法蓮村を出て麓
川をよりりて川にそひてゆく北の山すれと奥福尼院瑞
景寺佐保田天神不退寺などいふより法花寺村へ入
る此村なりとより北にちれてユナベ此堀の南際より家も
堀も大きなり東をよればウハナへ近う立双ひり堀の堤

城西よりゆきて堀の尽くる際、圓家ありその北よりして
陪家あるべしすへてそのウハナベの東のうへにシヤゲの北、
旁よりとも陪家とおほしき百家ひきくはるこナベ
の堀を西より行つくせす此より水上の池の南堤あり池のこ
ろろ廣くゆるりして甚しう大きなる池ありなりニホミサ
なると水鳥ともありむれ遊ぶ池の北よりヒシヤゲ家大
ぢりてまじり水上村をへて畔つらひに常福寺村より
やの軒よりよりてネヂ山ヤヅぐくと機あり女よりハ城屋の

うへよりゆるりして教ふるまゝに軒をめぐりて西より
こ出ればすなうそちネヂ山といふハナベコナベヒシヤゲなりと
くらふればいよいよ小さじ家ありこれハ五双べる屋とこ
かくれてるをぬきなり堀をよのちより跡きよとえび
家といひて損ねて陵の形ちもきりし廻りむねみこ
よ三百九五歩といふ高さといふ高からぬがうへに沙まで築
きり山をれいと壊れやすきなりし木も草も生むき
らび頂も窪ききらすその廻りハ昌竹藪なりと云ふ

北冢を平城天皇の楊梅陵なりと近きといへる説あり北冢
より三町あり南東に楊梅天神なりまゝと云ふにシヤゲ
北村よりより西に北添下郡のうちなる冢の北より
田北畔トセつひに西北にゆきて歌姫を横きりてなる西の
うらにゆけば陵をなす作りたる冢なりまゝと云ふに
堀あり水ありて南にむききりて西にむききりて
そのむききりては其西に殊に高くおどろくこと
えりて里人のいふに神功皇后の山陵なりといま御陵ゴリョウ
山サンと云ふにサキともよなる御在所丹ニくま方カタより南
にむききりて堀ありて水ありて南面にむききり
ゆき堀の南際ハ樹木より茂りて行へどもあらぬハ
里人の踏ゆけりてるをこゝに樹むらの南を西にゆけ
ハ山上村の氏神なりまゝこれの樹むらハ北袖のまゝ
森ありてそ有ける社の前を猶西に行すぐれハ山上村の家
立南のうらにありて北に方へ堀の堤に登りておどろく
川に冢あり其北に石塚大なるありてまゝ御陵

山形とよの堤の及此まゝに御陵山の北うしろとめぐり
てこれハ御在所の後ろより石階を作りて御在所の峯よ
登るべく構へ石階の下よめをせめたる小門鳥居など立
り恐^{カシ}しと思むなら堀の中此置路^{オキミチ}つひてへまぬ
これと登る石階は右左には石燈籠などよふものいろいろ
立てり石階のぼりとも御在所のうしろより小き屋も
あり巫^ミなどよふもの来て湯立などもするやうな
度れくものとも申又いと小き紙^{カミ}の幟^{ノボリ}といふもの赤きや白

きやあまきこまき御在所のめぐり踏^{フミ}りけるを
南にめぐりてこれハ石椁の石やあらむ切石二つとも
零^シてあり頂の正中よハ御棺の蓋石と般^{ハツ}うら出きりその
まぬ棟^{ムネ}きこく四方ながれてさなりけり家此屋根の
し此御陵山の根廻り三百廿三間ほどを樹立いさう茂れ
と近らる此御陵山を孝謙天皇の高野陵と充^マきり説かれ
とも當らばこそ陵此作りまぬより垣壺を埋めりらし
たるなどその御代此時勢も合^カり延喜の式に高野陵

の北城東西五町こひろも合カチらんとし一実高野陵な
らむる西に双へる成務北御陵ハらの北城の内に入るへ
きをいひにせむ故今おもふこの御陵山ハ垂仁天皇の大
后比婆須媛命北狭木寺間陵あらむと我おもふもと
らし堀なるの置路を堤といひ堀をめぐりて西へかへる
北堤の西もやがてまゝから堀あり堀のうらゝ家あり
石冢といふ御陵山の西すく北にたききて立り北冢のう
へすべて石をシキ葺きてこれを石冢といふと石樹立さる
こゝを以御在所用くまゝ方カタを未方に向へし御在所
のうへ土を平ナラして成亥のうらゝに大きなる切石を六つお
双へりふと貝原篤信翁の巡覧記にたゞされしと
こゝ堀アキをきくくし特に出る御標の石形へ北冢
北根廻り二百七十六間ありと北西大寺に傳へれる班田
の古図をみるよりの石冢を成務天皇の楯列池シラ後陵の
うらゝ當れ北城も東西うらゝ一町なる東に近く御
陵山ありて廣く取らるるなりと今この地勢より

合カチへりふの御陵山石冢などの北方より古冢の大きき此も小
さふといと多く立るるまじりミサキ村をよの石冢の西より
了無冢の東北より北より北より北より北より北より北より北
幡宮おこしきまはれ北を西へおきて森をそひて北へゆく
北もといと長し北より北より北より北より北より北より北
森の北より北より北より北より北より北より北より北より北
北樹ども北より北より北より北より北より北より北より北
北松木は残せる中より三間より窪より北より北より北より北

御在所のうらハ圓く前のうらハ方カタまで南より北より北より北
がう四百二間高し北八間ほどと北より北より北より北より北
る所もろくふれ白となりて麦の葉菜の花とらええふ
ほろ生オキサチ菜えり北冢の在らる狭城山北出崎まで地
形おのほろ高く北後ハ山立つ北西追ハ際キハより低し
陪冢もいり北ガサシ北考謙天皇北高野陵より充てる
ハ合カチく北近ら班田の百圓と據考へて神功皇后北狭城
盾列池上陵より充てる考をいよる北今北所より来てか

の班田図との地形と考へ合するよりの 五社神ゴサシの西に
しうより石冢北西北の辺まで楯列池ありにて此五社神ゴサシ
ハその池乃東北高き地とられバ池上イケカミの陵といひかの石冢
ハ池尾の盡きる東南の辺とあれハ此後イケノシの陵とていひなり
べくもあらもこれより此五社神ゴサシの西の山岸より西のこゝを思ふ
よる秋篠村と遠うに楯列池ハいつの代よりあらせり
けむ令ハ跡きふ残らぬハ半と一つら此田の所にも麦の葉の
青みよりわら岸を下り畔アベつりひりて西へゆく秋篠の村な

らま西より南より秋の寺より辰春をあれまなり陸うていと
物さびしいと古びゆる御堂のうらふいとふらびゆる薬師はす
ら十二神おまらふ香水井を此堂より西南のすしと第堀
つたれらるし川の庵おらそくに鎮ツうりて見るべくもあ
らびありより南よりゆきうて西大寺まら高野タカノでらとも
いふなる佐紀郷高野里小建られきる寺なるより
てさかいにたまるべしされハ此ゆるを今と西大寺と
とよみれと昔ハ高野といふ地なれど此寺の本願

とまを孝謙天皇此高野陵との近き所に存す(此を
此より及の辺にもあるがぬ那もとの見えぬとあそ心うん
れなるとかういひ考す此寺城といふ所をほり及のちり
ちる心よかけて見れともいへびてむなりくあもゆたす
きぬ後、紹運録をえりし高野陵、西大寺北也とい
えりし一ふまゝ大和志をともえあそやれし西大寺村
古墳ありし記しる城からび尋ねず(此)あそそか
へすりしよひなぐらけりれ菅原天神すげはら寺

喜光寺
とよ

なごりくうてあそそかれ飯くふ裾もきりともと
りうやーりしてあひきことわぎうなりし菅原村を南へ出

なるれハ奈良より

掠嶺越(クラガネ)

より及し出ぬるう南に蓬末

山大ききし申冢上樹立竹むら生茂りてめぐる此堀いと廣
こと水めがれり此宝来山も例がぬ小御在所内くま(ハ)方
よて南に向ふよの根廻り三百四十五間御在所の頂よ
四間をその窪といふと我れ垂仁天皇の菅原伏見
東陵ありと形む此陵の東北も古墓とらんち小丘二つを

ら申掠嶺乃を西へ引て居の北へは大きからば木茂き内家
たアカホ天王とよふ家上社阿の西の麓に鳥井と安康
天皇の御霊を祠れとよふ兵庫村その西へつれぬを
まゝ兵庫山といひり宝来山より西北を引猶よの大道を西
へゆきて宝来村の人家あり此村なるより小徑を西北へ
出て氏神の森北東つら故に引ひて北西へゆきて低き岡の
なつたに松茂りきるところ西宝来ともホテンドウとも云ふ
堀ハ半ハ埋れ陵の山ハ大なる堀壞してさやうにあらう
堀残りきるとハ御在所やあらむ此東面の半腹に小き石
地花を立よせう今ハつらく荒損ぬれどもよく付る
乃く東南のころへ長きうあうく尾なるころハまくの方なる
所を壞ちきる跡にやあらむ秀実の山陵志に保天堂と
ハ穴穂天皇といふ言の訛り轉ろひきうよて此荒冢そ安
康天皇の菅原伏見西陵ならむといへるさもなをぬへし
百事記に菅原伏見岡に在りといふるも地勢よく
合むり此よりすべて低き岡山なるもとの氏神の森

そむより南におりて小徑をつらひて暗嶺越のたゞしづ
茶店に休きて酒いそぐべなどい雨いとつらう降りていとよひ
ければあつあの大及此東坂といふ所を登りてふりて熊取
沙茶屋をどしふ村すきて富川をこらる富の小川此川にみ
あうとせむむいひの山すせよ大きけ家どもあまきくせ共
川より一町をこも西へりて山すせの田及よ入りて南にせく
山田のをた辰巳よむきて立る家ハ丸山といふ後ろ円くま
へたて廻りま堀もあし家のうへはれすき平ナラして畠と
なりしとこみの南にサはなれて大家といへるまきいと大きけ
とづめくこれ堀もななく形も円いふなきて寅卯に向へり松な
どあまき生むて御在所の頂窪も多し此大家の西よりろ
の山つぎと同一形して木茂き古家大きなることあやういん
やらるあのみ丸山ハ中村の領大家よりみ妙くハ小和田村ユタの領
ありと共此あまきうりほど風よく吹きていとこけしうり降れ
ハ堪ふくともあらぬとよらむ家君もあし南にゆきあつて
小和田村の人家といふ村の東北きはくまき古家ありと南の

いふ半^原おけちて家居する民もあはれ北よりをきて登りま
て暫^ハ休らふはし出れば北百家ハ何ちよ家ぞと問ふ
と名も傳らぬをりく一死を堀れハ素焼の壺いで傳るなど
うづるさても北^天上家居一そあ一うふはのふろそと問へ
ハむうしおれかきて傳れハ其^くくとなと兼り傳へ傳らばい
ふ風すし吹やうれハ^ワ後の家上ハあやうてくるふ大う
ハ壞らて屋敷より一ハ^レ北と何ともえらうら^ハ北の
りぐりぞ因う残れる林宗甫が大和旧跡幽考に平城天皇の
贈皇后藤原帶子、河上陵ならんと記しし小和田村の
東なる百家とよハあれら^ハ指ていへうふされとあれらの
百家ハ其の御代よりハなむいとふまき世れものなるし猶南
のうへ竹藪よそひてゆんがまゝに百家はと大ムカに^ニの城^ニ
村をどまてしてゆきゆくふ百家あか^ハい^ハは^ハ外川^ト村を
すきて土橋を^ハと^ハて^ハ左^ニを^レて堤を^ハ持^ク風雨いし
う吹き富川は落ちふら^ハて^ハ風つよく吹来て余と
いふりるか^ハ余と吹き^ハて^ハり^ハべ^ハを^ハら^ハねと

人の家君もあつりよるんねバ立よるべき陰も此いと
いふ苦しさをぬへよて損ね奪ふ頭さういれて堤の
上をさうくと強く風いなるふきよやたてよ平きふと
限りありさらぬよるつれうちなる旅衣も残りつゝ
なく濡かぬさう幸うして小泉といふ里の橋よぬ東
のつめなるぬよをせ入りて衣志げしてはげすなると龍
田まてはくふ行つてべく思ひおきてくれど雨風猶よまれ
バ地所よやどるよめからうして今よし堤ハ富の緒川の南
の堤よぞやどるよるかうやどしし宿ハ富川の南岸よ
て夜すゞ水音高くきこえて千鳥などのなるとまの
一寝られぬまに板戸おちあてんいふせそ雨も風も
なるとなるとやそ月いと白うさるこれハ春日山高月ハ
さうくとんさうさう

廿日そらよく晴れバ鈴とく出る竜田への大石ハあ
より南へ小泉の町をへて行くべ地を高安村へものす
べくてよ富川の橋をさうりて右ぎぬよ川よそひて堤

ちゆく地まゝしてたのうゝ池三ツをりし双むす狐申
きつて左へ下れハ高安村より北 北間七所をりしあり
村の東北なる森のなる 北村の産土神天満宮をりし
ちん旁に神宮寺として小さきちもほと立よりて北村左
る古家尋めたる僧ハ心えすげなる故若合しるさる人
いひくふ狐家と申があらむ初丑寅のころに侍り筒井
街とて北北に東西よりよるの旁に池双へる東のそ
ての池の南の田中ノ字を都田ミヤコと申り田のなるに
と小さく一尺許の高さよりて残り侍りたのれ若くはし頃ま
てハ木まも残り家も大きき侍りしふ所より狐のつど
ひ来て子む所とて侍りしよとて狐家と申り侍り又北
森より半町許南東のころに御墓ミカガと申り所もいとふ
て残り侍り北村のうらま北侍りし侍らんとしふこいでそ
のふか教へてよとて北をりし又にしりてるふなる
よりハ少し高き田なるた高きハ四尺をかりめぐり十八歩許
なる小家のふりし御墓ミカガのなるよりしてむうハ北をりた田は

どいれ家まで木立も茂く作りしをナカマとヤシの多穢

のこ北南の村は住て木を切ありし作るがうろくとして

北田ぬしかく木もななく家も大うくハ田もむら北作り於

は北野の一町はよの田の字をミハカとよび北西よ低

き田の字を興ノ前と作り作りとよぶの男よ桓武天皇の

外祖母ともみ大枝真妹朝臣の大野墓を大和志ノ高安

村に在りと記しハハの御墓北ホとの墓畔ノ家一ありと

いそれど合ハなし北村中を西へいで富川を西へり

ふつふかのこみの北川の絶えばこそ巨勢三枝大夫の

よまれり北川のほとりともつらぬ高安よりりまで

ハ大野川ともいふと北鳩寺法隆寺と西のうろく

堤より二町をり西に北きて南のうろくに駒家とて後片

くま方より大きからぬ百家は家上ノ石北宝篋印

塔を立つ木立も生ひりその南よりきて東福寺とい

ふ寺は東南のうろくに美く木立生ひり田家と

り田家ハ調子丸の墓駒家ハ聖徳太子の乗多し甲斐

黒駒を葬^{ウツ}し墓なりといふハ以と信られぬ説^{コト}ハ此^{コト}ま
し法隆寺の丑寅のころの田中ニ大き^クて木立茂^クる家
ハ頂^ノいま中宮寺^ノ宮の御墓^ノ所となれり地^ノの東ニ大^クう
祭^{アハ}きて畠^ノなりし^ルハ太子此粟毛の駒を埋^ルり家^ノ左
リ形^ノといふの木茂^キ家^ハ大和志^ノ山背大兄王此字^ノ祥
北岡墓^ノ充^{アテ}き^ル家^ノうほらゆの北岡といはる^ルハ地勢^ノなる
といふ今お母^ノう^ニ三井の岡本村^ノなる岡本寺
法起寺といふ
山背大兄王建^ル
はる北岡の岡本^ノう^ニてそのほ^ノる^ルの岡^ノ北王^ノ御墓^ハあり

まうほむ形^ノとおも^クし法隆寺^ノま^ニる巖^{イハ}ハ御堂廻
廊^ノさ^テハ五重塔^ノなどいと古^クびて立^リ西^ノの門^ヲを出^テ二町
ま^ニう^ニ西^ノへゆ^キて南^ノへを^レ西^ノへを^レ行^クる右^ノ田中
ノ赤^ノく^ニなる^ル円^ノき^ノ家^ノは^レと^ノ人^ノこ^ノヤサキ^トよ^クて天
皇^ノの陵^ノなりとい^ハる^ルハ何^ノ天皇^ノの御^ノなりとい^ハる^ルハ
廻^ルり^ノ堀^ノなる^ルも^ノあ^クいと大^クき^クも^ノあ^ラぬ家^ノなり^ル此^ノく^ニて
ハ西^ノ里^ノとい^ハる^ルハ猶^ノ南^ノへゆ^クる木^ノ立^生し^ルる^ル円^ノき^ノ家^ノは^レゆ
是^ハ法隆寺^ノの南^ノの所^ヲを西^ノへ出^キる大^ノ原^ノの南^ノへは^レる^ルなり

りな家ゆく及ハ小なる事てかの事此田家の遠うこ
西まで大なる出づればすれども龍田の町なり所なり
西へゆきて及の北の岡すそ龍田新宮立々庭鳥いと
まゝなる鳥居の前なる茶店まで去りし休む御廟山尋
ねて此屋のまゝと居しす御社の左方より北へ出
て社の後の岡山を指さしていれむむゴバウ山と傳るとい
ふ其古家ハいづくと向へばそよの山の西北谷をへど
西向なる岡の版はあれ一むら茂れる所を御廟と
それ此傳らむといへど西へゆきて西なる岡すそ
登りて畠のなつと一町なるを北へゆくと老きなる松十三
株とらの木はまゝと生ひし中一石など出きり家の形
は損れて今ハ高さ亦も残らば此木の茂れるゆかり
四十歩余りありその井と廻りハ皆畠と築きし石前女
王の龍田苑部墓を俗に御廟山と呼と大和志に云るや
此家のふとるべし鳥居の前かへりて茶店の前より
半町を南へ移きて及の左に清水山吉田寺といふ寺あり

り是ハ又の南好^コ小吉田村^ニ属^スる地あり東^ニをたれて
西むきの門を入北^ハた方^ニ南向に八幡宮の小社ありその
東^ニ本堂あり又六の仏ありま^ハ北本堂と八まん宮との
間を北方へ少登れ^ハ社の北後あり古家あり家の上^ニい
と大き好^ク歴木三株生じ^ルと^モ近^クあり里人らの太く
ぬき^ハ二株まで切^リし^テその根を堀取^リて家をほり
壊ち^レれ^ハ根のともより小石をま^シり^テ出^スる^トともあり
く損^ハね^テる家の壊^レれ^ハ崩^レれて家の形もわきが^ハく^ハ
形^ハぬ北家今のめ^ダう^ニ七十二歩許あり八幡宮も北家を
かき^テて^立て^しる^トも^ハ中間人女王の龍田清水墓と六北家^ノ
ととの茶店^ニ帰りてま^シり^テ休む所なりを西^ニむ^ニむ^ニむ^ニむ^ニ
昨日の風^ニ傘換^ハね^レれ^ハ雨^ハ降^ラら^セと台羽^カと^ハ雨^キ
め^ハ買^ハふ^ニ龍田の町を西^ニむ^ニいづ^レハ^ハ平群川を^レれ^テ龍
田川もい^ハむ^テ川岸^ニか^ハ下^ノ木^トも^ハあ^マり^テ植^ハら^ハべ^テ
川^ノの^ハ景色^イと^ハ橋^をと^リ坂^をと^リて^ハ總持寺^{勢野}
坂上^をと^リ山^里を^ハて^テ立野村^ノの^右北^本茂^ク廣^キ森

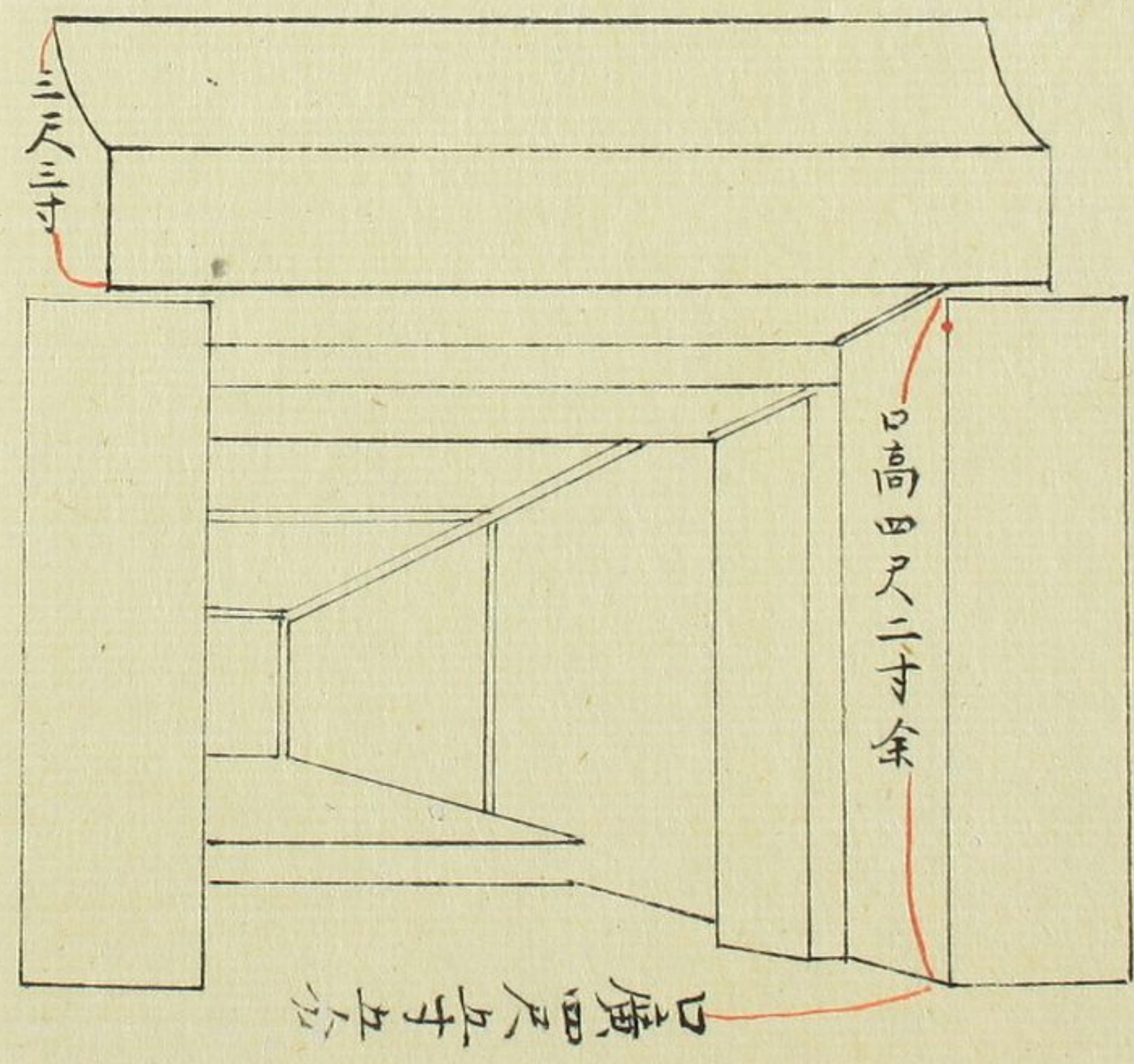
の中、龍田神社いと奥まうて立々ふ天御柱命國御柱命二
柱を祭りたる御社とて龍田比古龍田比賣も同神のまゝ
の御名形も祀を今ハ社を別ワ立て祭りしるありとて
とよのなまかへして茶店より休らふ高き所なればんとして
いよいよかれ飯とも出てふそも此乃ハ龜瀬峠カメセをこえて
河内國へ出るなれば龜瀬越といふや古の龍田越ハ此乃
のこ形もへし日し及を猶東よともうて右をるまゝ乃と
彫ユリりたる石のともうり古よよのれて小乃をくれハ龍田川

の岸よの川ハ長谷川の川も大和川のかへ上よてさ
きに渡りし平群川も落合て流る川なりとの川すちを
界よてあらるハ葛下郡形もこそかよそめにもつせり挾
りたき板橋を足もさうりくもうて久度村の田乃の
をゆきたぐ日見橋をりて南よ北を乃の右ミキ上達
磨寺あり西も東も岡山立つきていとちよし東乃の岡
ハ廣瀬郡なりとそ此の村をすべて片岡庄とい
ふ王子村の枝村形も寺よ入りて本堂北東、旁よ小冢ふ

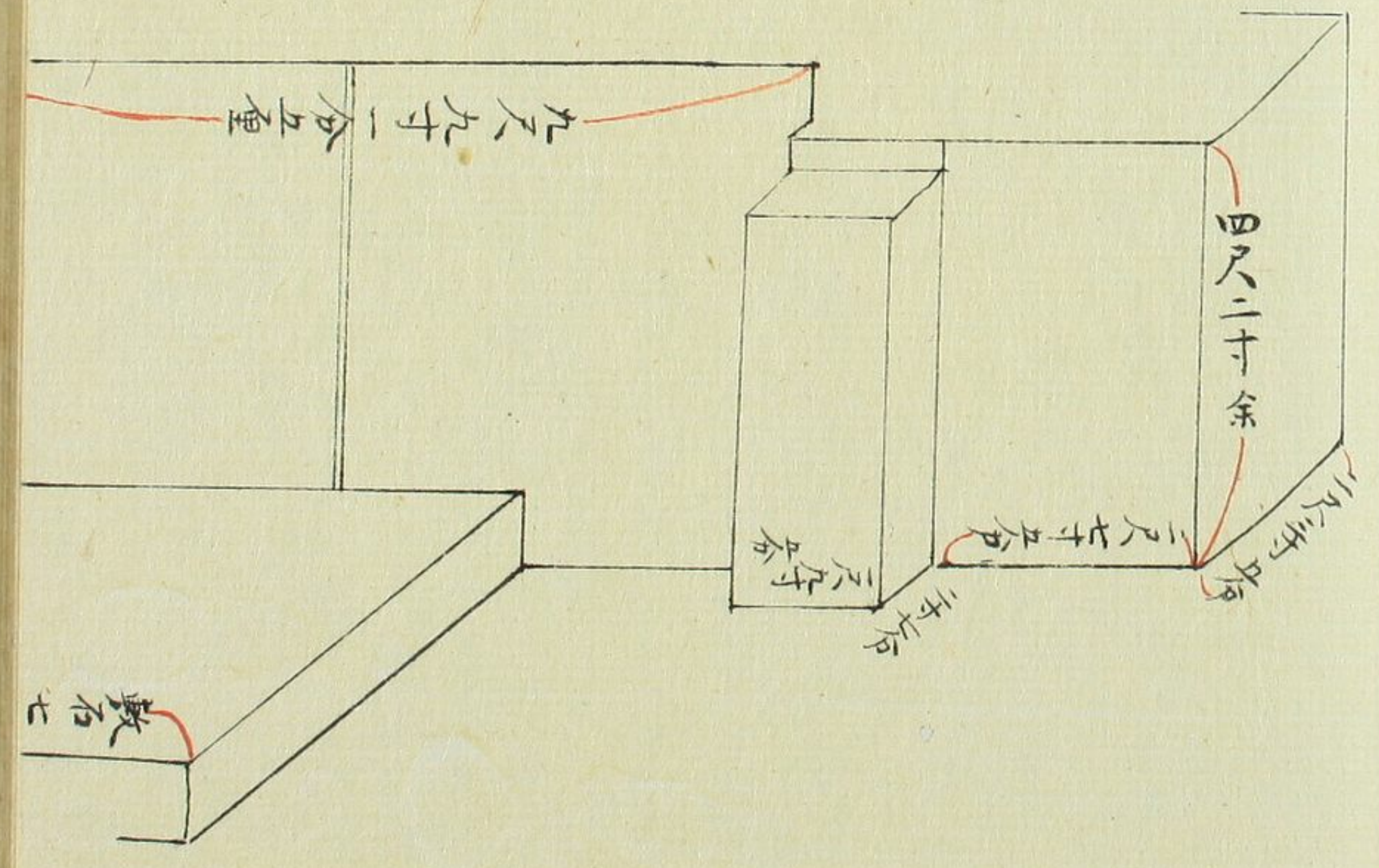
しるありと南なる冢の上より役行者を祠り北なる上より
金毘羅社ありと北社の下東向^{今年}と這入るばるなる冢穴あり
り此寺の南門をいづく南より立双へる人家城門前村ともよぶ
らより西南よりゆききて馬脊坂の尾を西へ登りて右方に樵路を
登り、五間四方より小溝を堀めぐらしきり、所を御廟所ともよぶた
を平らぬる所より高起ともよぶる山陵のすべりともなり、こ
を孝明天皇の片丘馬坂上陵なりといへばいと疑ふ、是より
北よりゆるり皆山畑より峯ノ垣内ともよぶ所も今ハ畑とぬれり

大和志よりハ陵畔に冢二つ有と記し、これと今ハさるものあり
にんじん峯ノ垣内にいへし、御陵もその陪冢も平らして畑
となり、ゆるりふらそ此御陵のおとは猶よく間きさきまは
ゆるりゆるりなる此坂をもよぶか、く下りて此所をうると南
へゆき、て下寺^{シモテラ}といふ村より西よりゆりて今泉村をへて平
野村よりゆりて村の東端より正樂寺あり、その前を猶西より
ゆき、て尾のゆるり登る路あり、此路を北より登りて右のゆるり
にめぐり、四十間許なる円冢あり、字を冢穴といふ冢のす

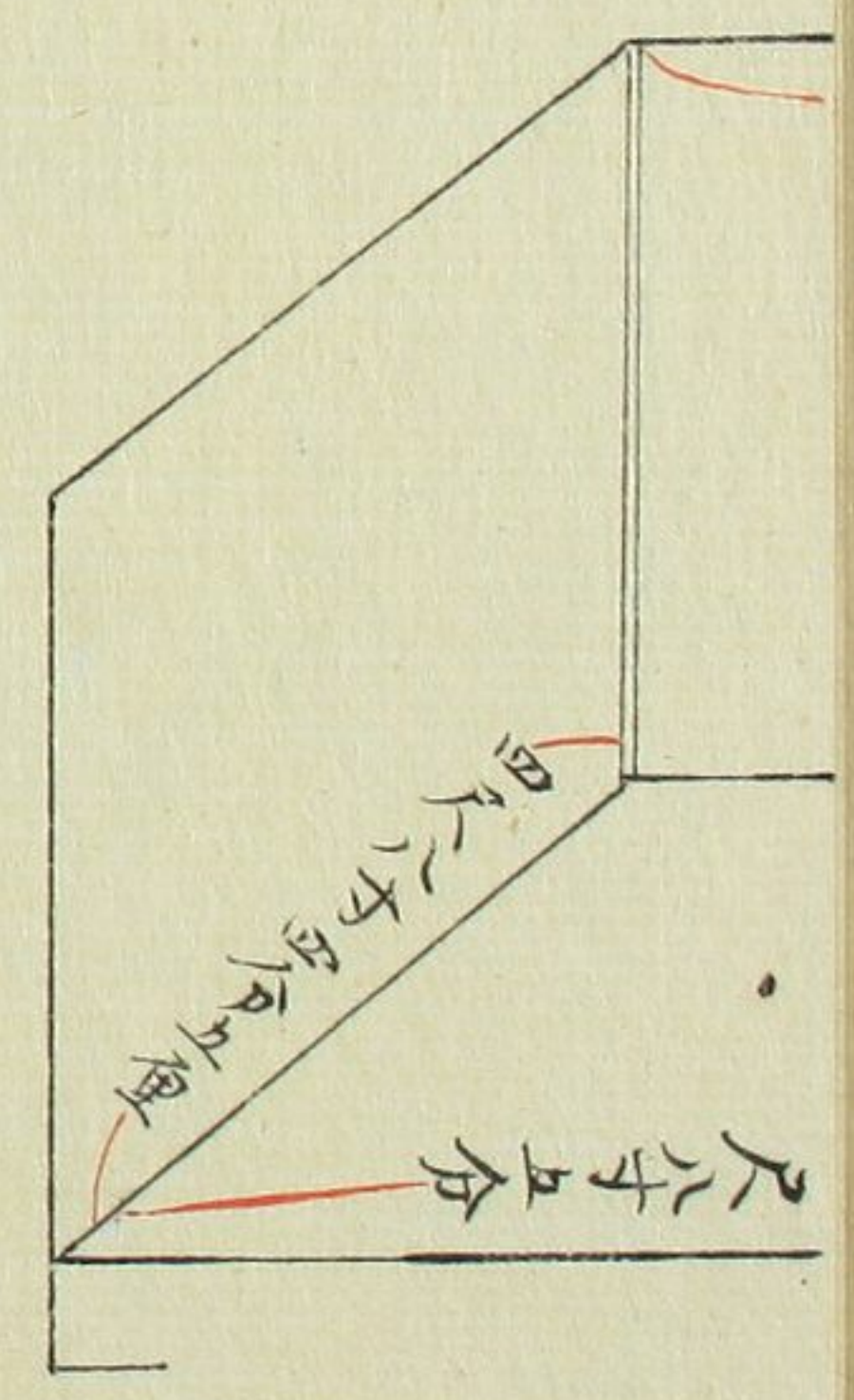
石室南へはこれと南むきして石椁の口頭くれし其口の廣
 さ四尺五寸五分高さ四尺八
 寸奥へ深さ九尺九寸一分余
 りな煉石にて作る横三枚つ
 の天井三枚奥一枚椁の口を
 塞たきりし石ハ尖せてまじ
 御棺を居たしし所ハ石以
 敷て床とすなり



石室此うち故委し
 見しるさぬ



今見えし所大より右のぶとし此冢を顯宗天皇の傍
 丘、磐坏丘、南陵より充きさふいうにぞや、おほゆるそも此石
 槨の内のさぬをかくし、も図ける、夜にあらまき、なほ古冢との
 なつに、おほけて石槨の内のさぬ、れよく知らるも多し
 と自然なる石もて造立き、るが多し、て拙き筆より、繪すも
 写得、る、字、り、き、り、も、その、制、様、を、よく、心得、ら、る、ば、う、る
 細、く、造、り、て、あれ、が、図、も、字、り、や、す、く、そ、か、ん、じ、う、を、得
 心、に、う、れ、て、か、は、し、も、の、一、つ、惣、て、の、陵、墓、の、石、槨、の、さ
 ぬ、も、大、れ、小、れ、遠、む、さ、う、あれ、その、制、様、此、大、槨、ハ、推、量、ら
 る、れ、が、形、う、つ、い、で、る、云、々、む、大、き、ぬ、る、石、槨、も、ハ、入、口、の、隧、道
 ハ、狭、く、長、く、蓋、低、く、室内、より、う、つ、て、い、と、廣、く、寬、か、な、蓋、い
 と、高、れ、る、よ、此、冢、北、後、より、東、より、ゆ、け、ハ、正、樂、より、づ、ち、より



まゝ東に北村の塵土神午頭天王社あり北社より丑寅の方
形に山脈はいつく荒れる古家には家やうの西東に双なる
かゝるも申れどもよく申れども一の家にて西
のうゝ御在所にて内く東のうゝ前にて方なきむむ
甚く壊れて内と方との間の低き所といと低くならずて二
つ双なる家此ぶとくハ申すも我はとくさる例は此
古家にもあるふと形に西なる家の上の南よりに大石の肩頭
を建て申すべし家のめぐる百間余りあるべし此家の字
を石ノ北といひ又車家とも昔ハいへりし此あるうの山の字を
片岡山といふとそふを武烈天皇の傍立磐坂北陵に充てる
も北はつうあしかの家穴と西東にありて北陵南陵といひ
うゝくむむ社のうゝうゝうゝて畔つゝひと南に出て畑裏
中筋なといふ村をへて上里にて大屋といふ高村も田河原
口別所形とて岡山を越えてゆく及の北も南も古家
はまゝいん申岡をくれば六道やまといふ村形に北村より北東
へうけて廣せる郡南西ハ猶葛下郡ありと我及の南形

此のまきも伝ひて南にこれハすれハら筑山村のまきこ
の家より西南の岡すそ城山とよふ大家らと御在所
内くま方^{カタ}て松茂り免がう此堀と水あり堀中^{ナカ}置路^{チキミチ}
成のころこらして御在所の左後^{トホ}通る御在所の頂倒さ
まふ窪とあり家のころ所^{トコロ}と壺の破片と申家のすべて
の大起き法華寺村始るうハナへむめうやあらむ大和志の
或説^シ此城山を茅渟皇子の片岡葦田墓と充きく^ル當
らざるべし山陵志より傍丘磐石北陵^{武烈天皇}と充きく此所より

細き山畑をへがく南に二児家^{フタコ}らと城山と付してまよて小
さきが丑寅のころと向へり頂す^ク窪と松を^ト疎ら^ク生ひ
ち免がう堀の跡残れり山陵志に傍丘磐石丘南陵^{顯宗天皇}
此家を充て其南ハ陵家村形^{カタ}りに記せれと今陵家
いふ村ハあり遥^トう東南のころ作内越の南^{ミナミ}にあり兵
家村を牽強^{ヒキツチ}き^テ説^ス形^{カタ}へし此^コら^ノ間^ノ日^ヒハと
く暮^クして^シれば^バた^トく^ク畔^ノも^トら^テ有^リ井^ノ村^ノ大^キなる
いてゆ^クて高田^ノと^キそ^ノや^トる^コす^レる^コ顯宗天皇

の陵を大和志よハ平野の南形る今市村よ有て宝永の頃
陵崩れて民の冢君とるれくし叛記とせるを彼辺よて
尋としるもしてましむるしるす今考るとよ
人も亦もよよハ殊ニ疲れし

廿一日鈴そらよく晴し高田を出て川よそひて南よ申
く中村とふよとく村ゆきして葛下郡ハゆれすきぬ
北花内の新町忍海の新町薑村形とハ形忍海郡なり
ふり左のちりつよ百家多くは上ノ寺とましるも畠

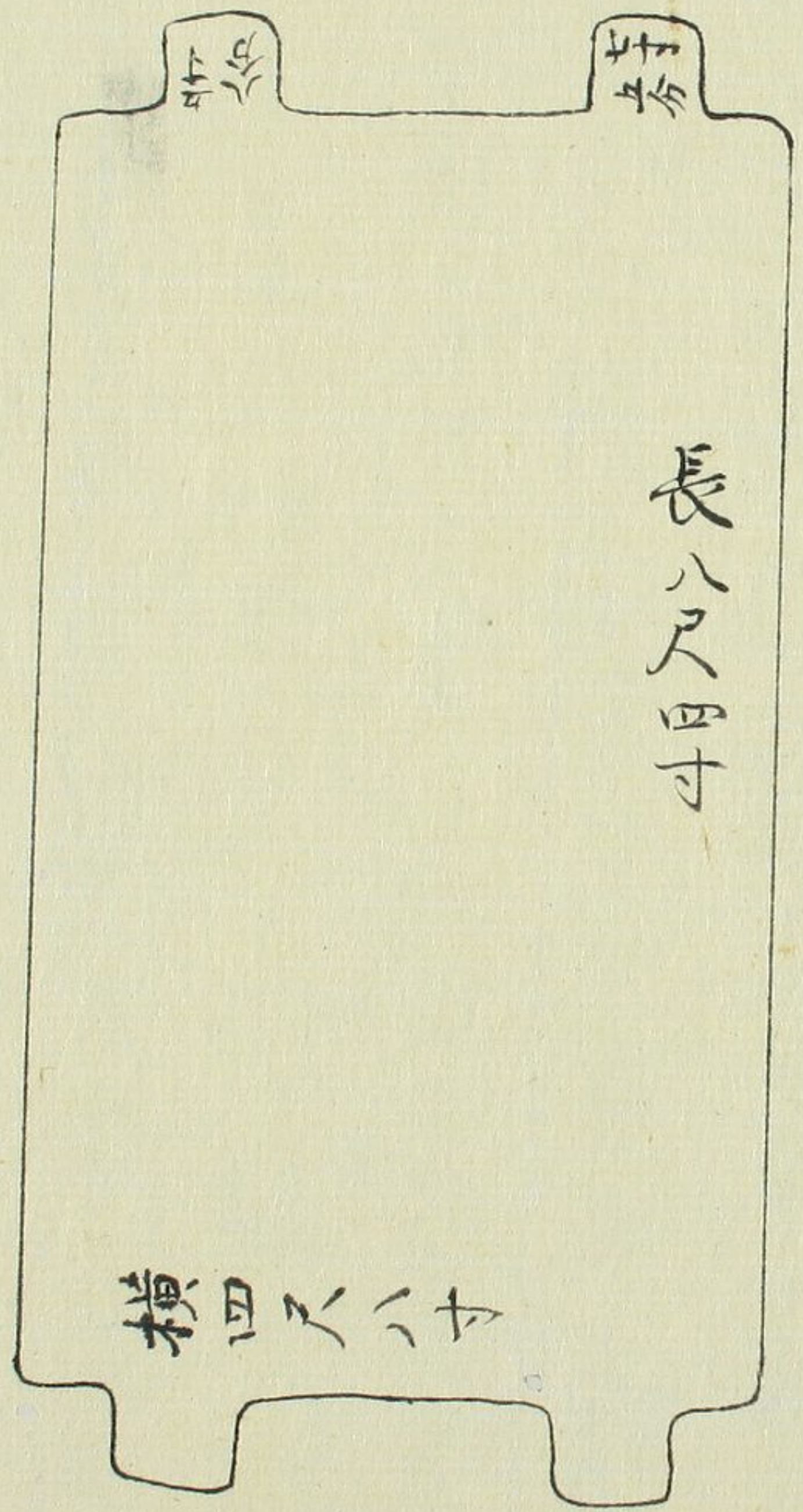
とすしつるもは忍海角刺宮よおまきまき飯豊青

尊の埴口丘陵ハ北花内村よはりて天和の頃桑山の何
一毀ちて八幡神の社を建つよし大和志よ記しハい
つ形らむと思ひいで人よとハそもく多ひ中村の
南より西よものしよべりハいよと乗るハい
るもよふいとちなも知らせよつるれもたかへさ
をやいよせまきとがうらひつ猶ゆくきよよむひれ
え争うべ形りゆも形らる旅のつれよよまきりり

乃ハ一町もふたつと歩む思むせられてるむ此間より南ハ
 葛上郡より松木村よの御所ゴセの所を南よいて水越川を渡
 て堤を右よ折ける三室村よの村の東端ある岡のうへよ
 明安寺こつ寺ありと寺乃西後よ官山こつ山陵ありと陵乃
 頂よ卯辰の方むきて小宮あり前よをこへ殿ありと孝
 照宮とありと額かあり宮より後殿よつけて玉垣
 うちめざらし石階の下よ鳥居タテありつうく此陵の制ツクリ
 かめを考へらる西むきよ造れる陵よ此宮在る所ハ
 御在所の上と推しつてめぐる円く西のうへハ方カタよ前
 とくく御陵のすそをめぐらるる西北の隅東北のこ
 う船ど堀の跡いさゝの残り直東よて埋よて東の山へ
 つけつ明安寺ハ東南のすそをかき立てるなるし
 いと大きぬ陵よて木も生ひたり根廻り百亦六間ありとい
 へる円形なるの量を量らるものれ是よの西方よ畑田山
 とよつ小山ありと周垣成就記ハ字をハタ、山ノ天王山と
 ありとこれ孝昭天皇の掖上博多山上陵形と我

ワキヤミシハカタヤマンノウハ

大和志よハ室村形ハ孝照の御陵ニ充ル山をくろて
 ワキ田との山田の畔をつつひて葛城川の堤より板橋をこ
 いて南よゆき越く今庄をへて南のうたに連立る山の
 ふもとにりりして離れ立る岡山の西す北をとりぐる
 て東南よいれハ室村の家居あり古家ハあつし岡の上
 ころ好と岡の南にめぐりて家居の後より北よのぼれ
 ハ宮山と天皇山ともよ古家と西面^年の家形ハし家
 の頂より五尺許窪く中よ石棺の蓋石を裏むけて
 置るその形



この蓋石は所御在所なる故古く築きしものなるし

陵の畝令^んと^ら丸く小溝を堀め^ら丸く^れと^そハ
近代の志^しと^し溝より西へ猶長く^{ケタ}方^{カタ}と^出する
ハ例化^レ陵墓の築^キと^{あり}なり^リ社家の根廻り百四十^ノ尺^ハ
リとい^ハる^ハ丹^ニき^クの^モ度^ガれる^トあり^テの^廻リ^ハ猶^イ
しく大^ニなる^ベく^也お^もと^る是^ヲを^孝安^天皇^ノの^玉手^丘
上^陵あり^トい^ハま^ス或^説ハ^玉手^村の^岡上^妙と^それ^{なり}
と^いへ^ト社^天皇^山の^北乃^田中^ノ陪^家と^おげ^キ古^家三^つ
あり^ト社^山と^東へ^下れ^ハ麓^ノハ^幡神^ノの^社あり^ト是^{より}東北^ニ
に^移り^テ條^村す^ぎて^富田^村に^つり^居る^家居^ノ北^後に^権
現^山とい^へる^小山^{あり}頂^{より}引^平して^其形^見る^と
丸^と古^家あり^ト上^ニ東^むき^小社^{あり}と^白鳥^権現^を
を^祠と^し男^もと^しれ^と今^{あり}の^社の^右左^の柱^にお^き
る^小札^をと^しる^ハ幡^官一^とを^春日^社と^かき^し
墨^痕幽^うと^んと^しと^しれ^と権^現山^とも^云い^へる^とお
と^ハ白^鳥権^現と^おき^しま^して^中央^にさ^る小^札も^サ
て^しが^落失^しる^とい^ハる^と也^邊に^畑と^いは^しる^の

之同へど何神とも知傳らばきく權現と云兼り傳れ
こふ琴引原なるともふ所ハなきと云へば此の分銅山と
御茶山との間をさふ中と兼り傳ると云ふ分銅六權現山
より東北の低き地といと大ききうへ木立と生ひずて成
亥面^午形る百家形を頂直くゆき平^{ナラ}して窪き所も残ら
ば其北に松生茂りていと大形なる百家を御茶山ともふ此
御茶山よりあなごの池内村の領ありと兼近と云ふ分銅
山を白鳥陵と云く説ハゆきと云ふ琴引きく原の名あるふ
據れるもの形一しされと大和志ハ琴彈原を富田村と原
谷村との間ニ在りといひ白鳥陵ハ天王山と稱ふといふ
ハいつれうごからむその天王山ハ此所より東南にあり
高丸山もて百家と云はれと里人のいひに拘泥^{ナラ}てをり
らばなりや一此所御茶山も家とあらはといひしを登
りてこれハ正に此家形なると思ひあるは天王山も百家
形らむをりてんかこし一此をうけしをれきて此御茶
山も例のさめし後円くま^カ方^カして円きくこの頂と云ふ二

丈許あり、七天許窪みありと西むきの冢あり、前のご
此右左に小冢のふたれもの連り出たり琴引原まこと
よびらるる形らハ合銅山よりハ此御茶山のこゝに白鳥
陵ハ當るハからむ西へ下りて田入ハ男ハ此冢の名ハ何
と云ふと伺ハ他ハ内村より東ハ當れハ東山とハ申はと
ハ御茶山といふにハやと云ふ知らんけ形らハ此をのこ
此字知らぬ形らハ一すべて田や山や此字を了とこそら
里ハ同試むるにえ知らぬ男をもた多た他内をたよ
見考ハ山すその田ハ畔了ひハ北へゆけハ右ハ山てハ方願
寺高くハ申此寺の南より東ハ登^{ノホ}ハ岡上の北ハ方ハ天満
宮の社あり東南ハ金北羅社あり此天満宮ハ北後ハ土す
ハ高く松生ひハるらるるハ四方ハ垣ありハれ大和
志ハいハる孝安天皇此御陵形らハ此陵の形ハ壊^クま
て前ハ形ハ後ハ形ハいハるを面ハとんえハれをいと
おぼつら形ハ一とも此岡ハ富田の東より長くハ連れ
岡山ハ此所ハ其その岡の北ハ極^タなるハ此所より東

へ下れハ玉手村の家居立双へり岡の東麓ハ小冢三ツ
許ハ其所より東のうゝの岡すきも又三ツ許ミ
中冢家立のなを北へ出て東へゆく寺田を過て相
原までかれ飯ふ冢村を東へ出て重坂川^{ハサカ}あり是より
彼方^{カタ}ハ高市郡あり橋を渡して左へゆくと越知村^{ヤチチ}をれど
右へをれて車木村^{クルマキ}へ行く家立の東後^{ウシロ}此岡を天皇山
とよぶ家並の間を東へ出て田の畔了りて山麓より
りてこれハいと高う峻^{タカ}く峙^{ツカ}立て登るべくもあらねど
はつらぬ小徑をもとめてすくし登れハ里人の墓地
まうなり地ふより上ハ小徑も絶えて楯など衝立ころ
むやうぬ強^{ツヨク}ちよ志もと掻くぐつ松のまごまをこ
け登る幸ししてすくし平ぬ所よきつれハ南より人
此踏分ふる小徑そあぬるあつとを顧れハ内此家^{ウチノカ}の萌
れきるひを頂の土いしく祭けて石櫛^{ヤネ}の蓋石三枚頭をれ東
面^{ウラ}一段低くまご石一つ頭ぬるこれ隧道の蓋石^{ヤネ}なり
へこれハ東面へ造りし家とせんとせり此家の北東の

上ニ双むてまゝ古冢なる一くんを以て川く高き所あり
草木立茂りてすべし其形を以てし其踏分まる跡を
とらつ北へのげうて峰の頂よりこれハまゝ内家^{ナカ}に
松木繁くらしむは是を大木なりと云はれく壞れ
これをも石を以て顕れしむは皇極天皇の垂智岡上
陵ニ充きくハ此冢を以て日本紀ニ載られし其
帝の御葬の時即子天智天皇の詔より大后天皇の勅
を奉て万民を恤む故に石擲の役を起さばと詔多し
趣をよく考へ合す(た)と如く御むすは此間人皇后をも
同陵^{ミトツ}ニ合葬り多し(ま)まゝ万民を恤むを以て此御心
を以てしむ(ま)まゝ蓋石の顕れし冢ハ御孫
建王の御墓ハ此らなる其の上ニ双へる内家ハ御孫大
田皇女の御墓^ミ也(ま)まゝ踏^{フミ}けしむるのまゝ
南へこれハ此村の氏神八幡宮の傍ニ下りぬいづく苦し
きなるも此らむしむるも尋ねてから此^ツ也(ま)まゝ登
りつづこれなどむらひ合ひ考へ右よりして車木^{クルマ}に降り

て休ふよの昔一うとしの喉うらたて茶店此土瓶も吞
ほつへし北村を北よとどろて岡北西麓にりくれと越
知村形うらよ山道を登りて折きゆく山中よて左
二まゝにりたをへゆけば妙法寺村へ出といへ右にちれ
て真弓村のうらへ折く北り及の右のうらよ小谷を隔
て隧道の口石頭れくる百家らり家よよ小き此岡丘あり
ておんうらよとんやれハ罐子といふものさぬしこれハ
里むと罐子家とよふ頂の後のうらうらうら登り家口ハ寅
方むきうらまの辰巳の方よ双むてユラニ家あり折の割
さぬ富田村形う分銅家よ似て小きし頂の西南のうら甚く
坂壊しうらよの二家ハ真弓村の領よて北うらうすへて古ハ
真弓岡といふ形うこれハ此家や檀丘陵をらむと折と
ゆら今よの地の形勢をうらう紀伊国よ行幸さむし経多ふ
へき道よあらう檀山陵を過りて却るとの百官これ馬より
下うらし趣ハ合むうらをらう此所より三町をうと東よく
くれハ真弓村此家立ちと東よ連きて越村の家立ちと此と

いろははたに西すうつうきぬあゝ越村の家立の中一五
 老神の社とるや及の右にまゝ鳥井の額に許世都比百神社
 と彫て探さるる當れや當らぬやとらぬしそとちてす
 たてつれなるまは北村のくすし許妨らるるがうつ男ハ三
 瀬村に今夜のやどりどりなるつきてむとる家元とてふ
 家いづねて北村の東端より家の北より入北ハ南面
 石櫛の口はらとれは川家あり隧道の濶さ三歩半高
 さ五尺五寸八分長さ十四歩石櫛の内の長さ七歩濶さ五歩
 高さ九尺余り石の面切をうて美し作構へる家
 のりづも大きして頂は窪しすへてはまゝの古家ども
 成り合すたにかさぬ月き家の石櫛北崩れしらぬ頂
 窪ししことぬ後月くまふ形に造りし家の発きし
 跡なき御在所の頂かならぬ窪しし心をとめてよく考
 ふべきことぬしそは北古家ハ真弓岡の東極まで西
 南のうにハ佐田村近く東南に檜前村といと近く佐田
 の岡に侍宿しふゆくと詠に宮出とすう作檜限まは

廿二日兩^上きりりて降る三瀬村を東へ出てきりふ乃内家ち
おきてころるふさとく人の丸山とよふ家ありまゝ東明寺家
ともふふや高から長わらぬのうへに内く三段の築
まき家にて中段の南面^南に隧道^{トンネル}の口顯れしつちきり兩^上
けりしおけりや隧道のうら池のこゝに水港へて足踏入
るへりしおけり里人のつづくに此隧道の長さ七丈三尺うへ
ハ石六もらぬ双へて蓋^{オホ}へり奥へいりまゝに及低^{ヒシ}くなると
室^イよりその石室の淵^ヒさ一丈一尺長さ三丈許大石三枚^ヒに

て上を蓋^{オホ}ふ室と隧道とみま自然なる石にて築く此石
室の内、縦一間半横一間高さ一間許なる石棺二つあり一
つは奥より西東よりすゑ一つは口より東によせて北南に居き
とそ此冢はサメくくして入るふ三段なるく廻りハミ島
より入りてきく頂よりくそ平なる芝生にて窪みなるも
るき麓は岡ともみな畠としてうらふ岡の中よりくもはら
れと遠くより望みんれいと高き地なるものと低き岡に
りしよりへし此冢ありくハ此東より近う見えたる五条野村

領あり大和志那とよ此冢を天武天皇持統天皇此檜隈大

内陵なりといへり定家中納言の日記に書かれし

文暦二年四月
三月六日

の盗人大内陵を盗れしと女帝の御骨を路に弃奉りて

その銀此管を犯取奉りしとと考へ合すへきとあり

かし畔をついてとの廣きなり出て南に控く此を

きりよましなりあり下平田村の家立の西端より己午

此方へ四町より山間に入りて高松冢といふ冢左方の山腰

より内にて立ち枝いとよぶる古松三株生し一とハふ

と此友ちよひて柘をてつゝ家の根廻り三十間許ありと
そ是を文武天皇の檜隈安古岡上陵と充き説ハ
かへしまゝ皇極孝徳二柱乃帝の御母吉備姫王の檜隈
墓と充きても當らばやあらむその日本紀と檀弓崗と恭
れ由記されしは檜隈の西辺形らてハ合むるは此家
らるハ真ら岡ハ程隔れハ形此家より南のく又東
くの山す我ふ家とらんもの多し後とちハ此家より
六十歩許北のく中尾石墓とよる家ありて文武天皇
の陵形由大和志と云む置き見おとせりといとくら
けし平田村へ歸りて家之の東北のく岡寺へ行及の北
ての岡す我ふ猿山とも梅山ともよひて松檻生ひる家
り東方内く頂らる三間をく窪て西方方形ハ西面
の陵をへしそのさぬ三段と作立らるすへて一礫を菅満
てらる四周の田の際をて低く六堀を埋て田としらるもの
ありをてさるの方形らるの南北下段は高さ四五尺許に
石もて作れ奇しき人の像四ツあり二つハ陰莖を露して

咲^エくくくく二つハ頭まろく^テ法師のくく^ク面ハ猿^イ似^ク
 北ハ里人猿石といひま^ニ堀出^ノの山王ともよ^シ背面^ノも側^ニ
 面^ノも又^ハ様^ハ形^ノ顔^ノ貌^ノひ^ラて鬼のく^ク黙^シ此^ノく^ク黙^シく^ク黙^シく^ク黙^シ
 り^テその^ノく^ク黙^シ石^ノ燈^ノ籠^ノの^ノ蓋^ノ此^ノく^ク黙^シの^ノ一^ノつ^ノ仰^シさ^マに^ニ倒^レて
 あ^リ此^ノ名^ノも^ハ元^ノ禄^ノ十^ノ五^ノ年^ノ十^ノ月^ノ五^ノ日^ノ此^ノ陵^ノの^ノ辺^ノ乃^ハ池^ノ田^ノと^モよ^シ
 田^ノ地^ノより^ハ堀^ノ出^ノし^テし^ヲ此^ノ所^ノに^ニ居^ルき^テる^ノと^モよ^シ今^ハ昔^ノ物^ノ語^ノ
 輕^ノ寺^ノの^ノ南^ノ乃^ハ檜^ノ前^ノ陵^ノの^ノく^ク黙^シり^ノよ^シと^モよ^シ石^ノの^ノ鬼^ノ形^ノと^モよ^シ
 此^ノ廻^ノの^ノ池^ノの^ノほ^ノも^ハ陵^ノの^ノ基^ノ樣^ノと^モよ^シと^モ書^クし^テし^ハ此^ノ猿^ノ石^ノ此^ノく^ク黙^シ
 と^モよ^シそ^ノひ^ラき^キ此^ノ家^ノを^ニ欽^ノ明^ノ天^ノ皇^ノ此^ノ檜^ノ隈^ノ坂^ノ合^ノ陵^ノ形^ノと^モよ^シ
 へ^ル誠^ノと^モよ^シ形^ノと^モよ^シ此^ノ陵^ノの^ノ東^ノ乃^ハ乃^ハ金^ノ家^ノと^モよ^シ家^ノを
 吉^ノ備^ノ姫^ノ王^ノ此^ノ御^ノ墓^ノ形^ノと^モよ^シとい^フ説^ノも^ハ近^クも^ハ出^ルる^ノ形^ノと^モよ^シ上
 も^ハと^モよ^シく^ク檀^ノ弓^ノ岡^ノと^モよ^シ葬^ノと^モよ^シ見^ルる^ノ形^ノハ^ハ此^ノ陵^ノより^ハ西^ノの
 う^ノ真^ノ弓^ノ此^ノ岡^ノつ^キに^テ檜^ノ隈^ノ陵^ノ此^ノ北^ノ域^ノ入^ルる^ノ地^ノと^モよ^シ
 そ^ノひ^ラき^キ此^ノ岡^ノ寺^ノへ^ハゆ^ク乃^ハ東^ノへ^ハゆ^ケる^ノ東^ノへ^ハゆ^ケる^ノ
 の^ノ北^ノ旁^ノと^モよ^シ鬼^ノの^ノ奥^ノ板^ノと^モよ^シの^ノひ^ラも^ハ百^ノ家^ノ此^ノ隧^ノ道^ノの^ノ口^ノ此^ノ祭^ノけ
 て^ハ顯^レる^ノ石^ノの^ノく^ク見^ルる^ノ形^ノと^モよ^シ奥^ノひ^ラけ^ルも^ハ形^ノと^モよ^シ

上も下も畑つゝとて埋ゝるものゝまゝとて塚穴も
あらざるやへつゝし又す

一東へゆきそ及の南亭の

低き地と及の背むとて鬼

の雪隠といふ大石とてりよ

りてゑるにその形かゝり

形ももの形も石棺に零れ

出せざるらむと古の人

云置れと縦きぬよ口のこゝく功開き了所あれハ棺ハ

用むゝかへし猶よの及と東へ低き坂をこえて右

りの低き所と立並へる家とものん申ふハ野口村形も田もとの

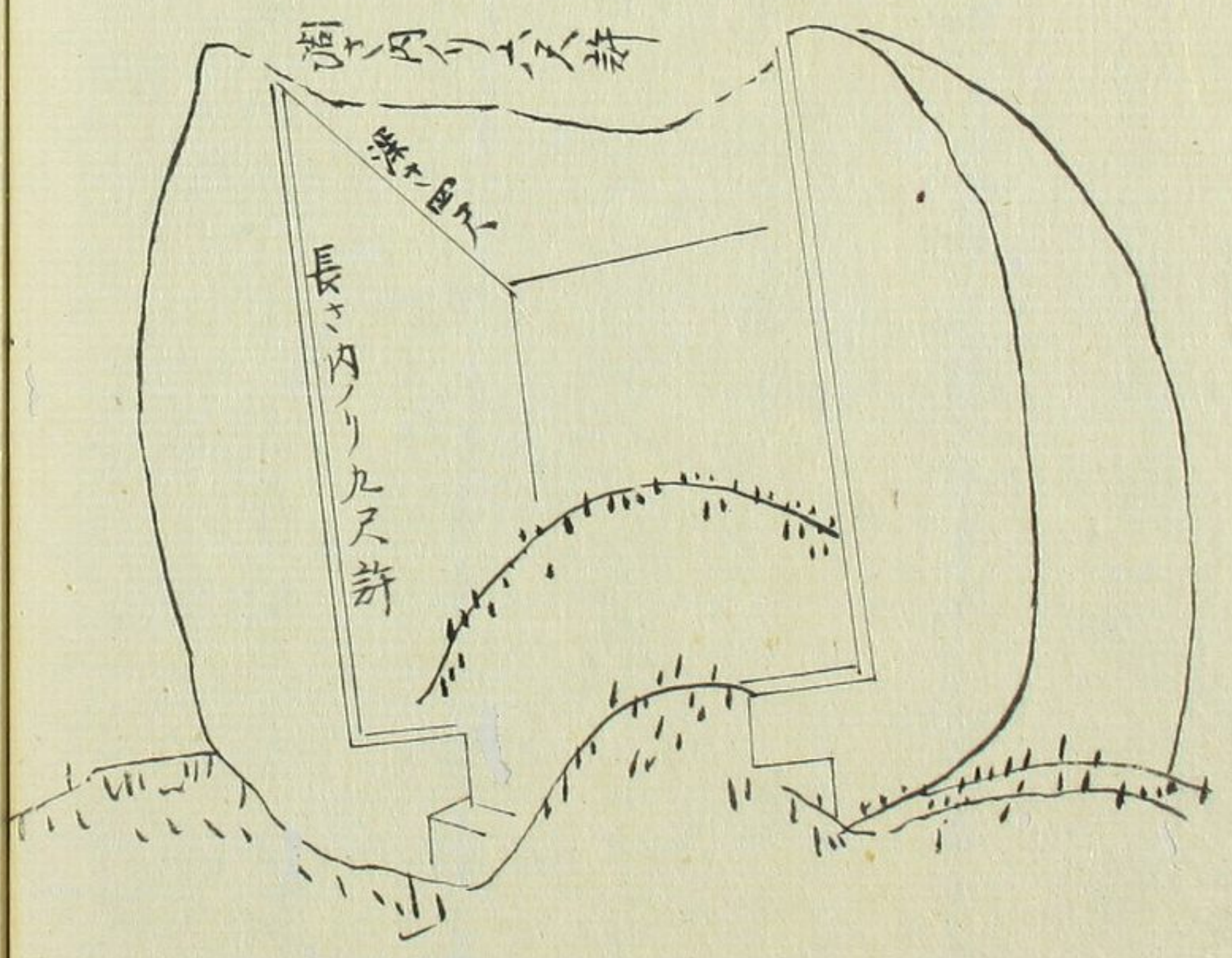
細尾を下りて向ハハ翁出きてうより甲西のうたむとつる

なれきつる岡のうらと高くおもりてん申ふそ王之家と侍る武烈

の震ともしてむうし岩屋の内をとも伺れ侍りしを思ひし

とて土もて塞き侍りといふ猶きうはりしれと雨とふを

ときれハ舞しといひ入ぬたの山す北の及を西へゆき谷へあつて



園に登る園の上より大きく丸く造れる家にて南面は石椀の
 口頭れり成かの云ひつるやうに土にて塞きしる家の頂上も
 甚しくけり壊ちて石椀の蓋石露出する所もほりてそのめ
 くりよふ松雑木ると生茂りきり此家の根廻り九十五間と
 きけど猶大きぬくそんをくさしてこの隧道の口の構へ
 ちとん外側ハ石は天然にて構の裏面ハ美しく切平しく
 る隅く屋内の障子を立す鴨居のこのやうに蓋石の裏面の
 口は横に細く掘通ししるしをぬくと実一切ををるしるし

のとらんぬち心ゆく中缺
 きいさもほさまく悲あり
 の隧道の構への内の洞さ八尺
 高さ深ささるといふ埋れて知
 られその王ノ家を倭彦命
 の墓に充き説かれともそ
 ハ此家の制さぬその時勢に
 合ふはまて天武天皇持統



天皇の陵そといひ近らる文武天皇の陵形らむといへる説
とあり安古岡ハ知らざれと岡上陵といへる合カひらる
らるし形本中尾石墓をこらむ後そそざらひへるけり
西北へ細き尾をかくれハ此鬼北雪隠のすらし西へ岡寺
の乃と出つ此乃ハいと近らるき下平田村より三瀬村の南
よととつて境原天神の森の前へ檜隈川をこらる森の
北へ西へ申らハ山の上へ岩舟とよふ石をこらる右の尾
の徑をつらひて西へ六所あり登り申らハ岩舟北旁より
此岩舟まこと大なる石形本廣く末スすはて高さ二
丈と餘りぬし横面ハ五五かくさぬ形そのを所繪
のやうに彫りしやう西へしやうハ人足推せて登
りて入る石の頂前うしろの両端高く中低く堀平して方カタ左
る大穴二ツ彫りし此頂の平形らるる五歩廣さ十一歩余り子
丹の方むきまきりしれ益田地の碑の臺石形らるる碑石も
いと大形なりけむをこの代といふにして零ハらかしけむいと
あや池を既ヤく瀧タをこらる檜隈川のそ我けそく流らる

弘法大師の地碑銘の序ハシカキ乃池之為狀也左龍寺右鳥陵大
墓南聳畝傍北峙クダ東眼精舍鎮其良武ムサシ遠荒壠分押其坤十餘大
陵聯綿虎踞四面長阜遙迤龍卧雲湯松嶺之上水激檜隈之
下トク山ノ子ノ方ノ下ノ思を出られてその見えるに子ノ方ノ
畝火山子丑の間又耳梨山丑寅の方又五糸野村の丸山寅方
又平平田村の猿山卯辰の間又何所をそとといふやと
北と名をした知らぬあつた何所をそとといふやと
まむ物知らぬあつたといふとどかひやし岩舟よりあつても
とらし尾のハつつして一所らうやとどかハ石椽イシノ登りけ出を
る内ノ家ノ右ノリノ三ノ瀬ノ歸りて昼食ケして七ノ
うへ出ゆく三瀬を去るゆきて西東ハ通ル
れる及チ候マシ北ハハハゆくて東ニをれて石川村ハ申す地村
の東北又叙る剛といふ大蛇をる池のならに岡を登りて岡上ノ中
山家といふ陵を池に堤を登りて南へゆき東のうへを
坂を埋て田ノうへにハ田ノをついて岡上ノ登りて
二陵の形甚く小さく崩れ損ねて全からず今御陵とせ

所ハ御在所の田起るものといへるをそれとて建てよ
と高た所は是前の方^{カタ}なるをいへる今より
心をとりて奉る御在所も前なるものつらむ
の制まよつて残りて成^年亥面^年に作まる御陵とんえり
此陵の免が五十間あるといへる内きこはれを度^カは
もの形もへくすべし廻りハ百間も猶り多く余りぬし
岡の周廻^{メヅリ}ハ四百七三間なりとせよ孝元天皇此^カ劔^ツ岩^イ岡
上陵にてゆがはれ此池ハ應神天皇此^カ十^ニ年^ニ作り多し劔
池ありと云ふ此池の南東ハ低き岡立つて此陵を圍^カ
免^チり^{マシ}似きく西へくしてさだめの及^チ候^{マシ}も横ぎりて道す
ぐし西へゆく久米村ほど近し久米寺の築垣もそひて
南^ニもたれてまゝ西へゆく久米寺いと廣くたハ
民の屋もと立並へり西へたきりて北南ハ廣くたれり
久米南^ニもたれて鳥屋村より東端なる家も何れと
しらぬれハ男^ヲもつてせむといふ此間ハ雨もたぬ檜隈川の
橋をこして村の西ハミササイとよふ家なりその制も女三

壇を築てうしろ内くまへ方へ丑寅に向し御在所の頂
よりうしろ斗より丸く窪むを陵山のめくう百八十七るを
と木立ハ悉切つて方なるこの高たつて松四五株
残してさとり人足を御陵と称もへり先づこの堀東方をほ
り弘げて廣き池と成し後の申酉のうしろ埋て田となし
民の家居を建てつけて舟付山村といふ鳥屋村の属村なり
陵前の堀をうしろ置路つて陵の東すそ成つてひいて舟付
山へ往くうしろなるとし方なるこの西の堀中にも置路ひいて

乃よりうしろふれ宣化天皇の身狭桃花鳥坂上陵なりとなむ
此陵より未申のうしろなる山千の升カ山といふ古冢升カ山といふ
升カ山の畧
り辰巳面のうしろなりまへ方へ後山つて頂大きく窪む丑寅の
方を壊ちて社を立きまへ社のまへ鳥居の辺北地中にも垣壘
の口連りて顕れし申家のめくうの堀の跡もといふ大和志の
此冢を斉明天皇の越智岡上陵と充せれど陵の制ぎぬその
時勢の合ふれ當らばまへ近う倭彦命の身狭桃花鳥坂墓
と充せり説もいふ此冢より未申の方の上りて北越智村の家

立近くはあり辰巳のころの山クニスヤマの罐子山とよふ家あり

眞弓村あり罐子家と別形と 望むに罐子といふものさぬしは

さきよぶるなり木立も生ひは是生して後ウシロ円くまケツ方ケツを丑

のころに向ふめづるに堀ありコスカ外家山コスカよりはいと小さくんを

りしは海靖天皇の桃花鳥田丘上陵と充つて説近より出来

れとも今この制ツクリをぬきころふいきく上古此陵の体サマは

以外マスカ家山より卯辰のころに山カ峽をあらせてゆけハ山を隔

てハ山の半段の家穴とよふ円カ家あり土甚く壞落て南面ウシ

に石椁の口頭れを土にて塞きしり此石槨の内廣くして

石椁一つはをころの男よ是を神明天皇の御陵なりとい

ふられど石椁石椁うけて存れハ不起石槨之役と日本紀に

えころ合カぬましくし此家より妙法寺村南に低くんあり

され益田此岩舟己のころに高く見上られ五糸野村の丸山辰

の方にんやられしり此山を東へ移して北にゆきしころ

男の家にて暫休むありし二所許北にゆけハ池尻村あり

此ころ領らハ神保めし此家の前をるる猶北に畝樋山の

南麓真名子山の東の谷に丸山とよぶ百家あり松の木疎ら
く生むるふとてハ低た小山の如くされと令せりてよ
くくんと南面（北）に作れり陵にて北のく円く南ハ方如
る形残りて円きころの頂に例のくく窪くころ所とあり方
なるころく二所窪くころ所とあり是ハ土を取きころ水の
根を掘きり跡とてくくく北家を懿徳天皇の畝傍山南（北）織沙
溪（上）上陵ありと近ふらいへり説ありよく當れりるへしこの陵
の東ハ一むら茂れり林ありて神の社とあり西のくく如く真
名子山に登りて尾上を西北に登れハ西面（北）に安寧天皇塚祭
き官あり北邊安寧天皇の陵ありとくまきけと令らるる陵墓
の形も如くきくおのつら如く山の上宮をまきくにそりて
けく西へ下り道ありハくく麓に陵の制札立しり是より北
西す如く吉田村（ヨシタ）あり北家立の北後（ウシロ）をアネ山如く家立
のまのく西へ行ハ及の南旁家居の軒下よましく人のオホ井
とよく小きく筒井あり水いと近れハむきくくくも酌つへ
し菅笠の日記ハ即ほくくくく井今もくくくと記されきれ

ど令ハも名を知らずきと人もなきも北井より西
に於て有る登る丘あり字をアネ山と云ふ丘の上東面
に小社ありその北方より高丘あり此御在所
窪しつ所ハ是より御陵の南側^{ツラ}に於て民の家居き
並に^{ツラ}またに陵のかつちいとよくもアネと云ふ
めろつとよくつらん後田くま方^{ツラ}にて辰^{ツラ}の方
向^{ツラ}方^{ツラ}形^{ツラ}の南旁ハ竹藪とありて吉田村の家立の北
後あり此家のありと云ふハ畝樋山の西南の麓より此安
寧天皇此畝傍山西南御陰井上陵ありと云ふすうさの目
記に此吉田村の翁のとのころに此御陵のめぐりも七十
年許あるきままでハから堀ありと云ふ^{ツラ}語^{ツラ}は^{ツラ}趣^{ツラ}を^{ツラ}さ^{ツラ}し^{ツラ}れ^{ツラ}と
いふあらじおぼつ^{ツラ}あり^{ツラ}此^{ツラ}所^{ツラ}より^{ツラ}畝^{ツラ}樋^{ツラ}山^{ツラ}の^{ツラ}西^{ツラ}下^{ツラ}を^{ツラ}北^{ツラ}へ^{ツラ}申
けハ大谷村あり此村より北東のころ畝火の山此腰に何と
云ふ小寺ありその北に社ありその北西の尾崎にスイゼン
家ありと云ふなり成亥の方^{ツラ}に慈明寺村近く^{ツラ}南^{ツラ}此^{ツラ}家^{ツラ}の^{ツラ}頂^{ツラ}す
り^{ツラ}窪^{ツラ}と^{ツラ}す^{ツラ}そ^{ツラ}の^{ツラ}ハ^{ツラ}松^{ツラ}と^{ツラ}生^{ツラ}む^{ツラ}つ^{ツラ}と^{ツラ}此^{ツラ}の^{ツラ}形^{ツラ}田^{ツラ}此^{ツラ}家^{ツラ}の^{ツラ}形^{ツラ}と^{ツラ}す^{ツラ}

とくんをさるゝハ新形の方の崩れをさるゝとの南のす
そに制札立しり此塚ハ畝火山の西北に當る此後靖天
皇の桃花鳥田丘上陵なりと然るを神武安寧懿德
三柱のまかの陵ハ畝傍山の何方とひり此陵ハ畝傍山
とりふとのひらこれハ此所ハひらし身狭桃花鳥坂上
陵の辺にありしと或書に疑これきりり驚きおて鳥屋
村の西南の山版形も罐子山を——も此陵あらむといへり
説述あらいてきりれど桃花鳥ツキとふ字も同くこれツ
キ田ノ岡とツキ坂とハ日一からびそのうハ畝傍山といふことの
無きたよして此所ハあら身狭ムサといひりり又身狭ムサとい
ふ言も無これハ必ず身狭といはると定めかゝるべし強てい
ふハその畝傍山といふ言のなきハ即ちと并真名子溪形もハ
例異トしてツキ田といふ地ハそのかみ世ノ名高かりし故も
ひりしこれハツキ田ノ岡は此所ツキ坂を身狭ムサして是所トを
んも何といふとあらむまゝ安寧天皇の陵をアネ山と云傳
へり正しうハ後靖天皇の陵をスイゼニ塚と云傳へり

さし人の口碑イヒツクムし捨つへきことかたぬと申つふやきつ猶よの
畝傍の山麓スツもそむて北山の北面オモテよりぬハ山本村あり北
家立のふたつこの山脚に古家ももとサキとらるる所あ
れに登りてつる下よりと登きとつるえつれ登りてつるふ
たきも思ふれぬ東へたつと小つ尻社もたつとまじ例の
と思ひてそつと後つ口英高の説をたつと北古家
ちらむとつるしハ大和志といふも神八井耳命の御
墓ミサキも即陵山とよくつるつら北即社ハ若井耳と里人の
称タふ宮にたつとけむ心をともてともまきのざうとつる
とらちけ北宮の前より家立のうしろよ出てまゝ山す
そを東へかけハ洞村ホラといふ穢多村あり北村ハ畝傍山北
北方の山腰より村あり北家とものなる山脈よ登れハ
北面キに鳥井キより東面キに社きてつ北即社の西うへの方を丸
山といふあり人々北神武天皇北畝傍山東北陵好といへ
る所なれば故あるあらむと心をともてつるつる山脈
のいさか平ら好る地に松樹も生ひつるれとつて窪める

所も高丘所もあく南ハすなをそち高く峙ち北ハく
ううと阜ヒキくならずて陵の崩れうほともをえびまう白
檮尾上といふへき地勢もあらび又畝傍山の東北と指
まき方隅もあらび安寧天皇懿徳天皇なるの陵は考合
すまふいはつやとサさくともかろ山版上作らうともをれ
れ此所そ実御陵の跡あらむとも思定うともをひきて此
所をしし神武天皇の陵そといひそめうう竹口英富といひ
し人そその説は天皇の宮といふ祠あるふなりといひそこ

この字をかきといふ所ありとされ白檮の尾上といふ名の残れ
るへしといへり此御社今ハ神功皇后の神といふれとそ
の頃ハ天皇の宮といひ一とまき蒲生秀実ハこの山本
村あり御陵山と思混へて此丸山のことを御陵山と書記そ
れは附會ツケンヘコトしていへる説ともいと信うしかうてまき此山の
西麓ありスイゼン家を此天皇の陵形らむなといへる説も
あれとそいともろ此説なりかし此丸山より見ると
直北マキクに當れる畑のなうに麦も植ず荒き地ハミササ

いよいよ畑をへし 洞村を東へ下りて畝火山を顧る
東北の隅の尾に一きそ高く見あけらるる 所あれハそ
とくはら登りてみる 此尾ハすべて大イハホき形の一ツ巖石
とて所々その巖石の高く顕れきるが 百家のこころも
えらるるまうまう 山の東麓の尾より出て畦樋村なる 懿
徳天皇の陵をも拜むとて南へゆき 坂々の 畝傍山の東
面北南より山をばなれて尾の東より木ともいさう生
ひらる平地の南むきくわら小宮のまわり 陵をらむときと
らるる 所もあし 畦樋村ハより南西よりいともとし
尾を北へもとうて東方より大窪村より小さらし又森林のうら
り社もと終りておハ大和志といくま 神武天皇の 福廟
り山すそをもとをなれて 猶此尾を二町許北へゆけハ尾の西手
に畑のうらふ半町許のほと耕さんららしきくわかの丸山
よりんえらるる 所よりニサイとよふ畑なるをよおぞ云よ
り田作るまら 禁めらせり ところとを此ニサイのう
ちより高さ一尺許より円く残りきる 小家二つあり北西の方

ふめぐり 卅步許とて雜木生む南東のうへに形ふふめぐり
廿七步許とて木も生ひず此二冢此間戊亥より辰巳の
十七步許ありしれ廟陵記に東北陵可百年以來壞為糞
田民呼其田字神武田暴汚之所為可痛哭也餘數畝
為一封農夫登之怡不為怪及觀之寒心と見林翁の歎
うれし所ぬるを白檮尾上と古事記にありふ合ふと
てかの丸山ちりも御陵形らむと竹口英富う云ひ置し
しにもとらたて此ふ人この云むんやせり説とも多し
北と名の丸山ちり尾上もあらはまゝ古冢もあら
ぬ御陵に充つべき由縁もあし今この田地も尾上といふ
へき地よりあらん又陵此形状も亡くしれと今も神武田と
ひ御陵といひ傳へきそ三つ御陵の跡形もいと著くまゝ日
本紀延喜式なるに東北陵といふもよく合へばあや実の
神武天皇の畝傍山東北陵ならむかしやとまゝ思ふ古事記
ぬる白檮尾上と白檮の尾上と讀めり故に山の尾上のおとの
しるし聞なきれど白檮尾の上と讀むべし此邊此地名

と云ふれハ地の高からぬも何ふよとあらむ日本紀延喜式
其他の御陵のこゝ丘上とも尾上ともなきてきく東北陵
との記さされきくむしより此御陵の高た地はらさ
りし一つの証ともいふて又その神武田の旁に堂之垣
内といふ字に負元のおろ此国の守藤原国光ぬしの此帝の
奉為一方丈の堂をその観音の像を安置て国源寺と号け
られし堂の跡をいしそむよせて此ニサニザイをい候
せて其寺の跡あるとしニサニザイとは祠廟此おとをり如どい

ふ甚イミき強説シヒゴトありその国源寺ハもと此御陵の旁に立た
る方丈の小堂をて又別に祠廟を建つべきいされけしハ其
寺跡にニサニザイの名の残るキ由縁ヨシなき城かの花山いを
らむむして山陵志といへる説ハ此僻ヒガおとにふそ如ど詔カクり合
むつともよる出て又二所許北へゆき東にたれて行道の
北方北田中の冢山といふ冢あり冢上ニ石棺の蓋石のふ
と形よの顯出シと也松など生むて冢の根廻り亦二乃ニ石
の玉垣キちめぐる西旁に櫻木も生むりこれけし神武天

皇陵ありといふとむむ地とて日冬ぬ猶此處
を東へゆく一里此翁の歎ありつきやうとちものこころ
つ先立ゆく哉ありよりつて山本村あり何しがみきん
がいに去年お母やけりありて禁められてききよふ
先うと一人がいへばいなきもほらびかの地の上田とて田租
あまきとてうまふ田地なる。此年とてあは作れり物もよく
ならひなりて貢らむ租税ばかりたれおの幸たて
て困^{コウ}とていふは幸と上られは嬉しきことと悦ぶありと
形どふなり猶何とていふらむとつてゆく。檢地といふと
昔よりきびくありて断段も次とせきり百き家山なるとも
昔無かりし幸貢おはせとてうまは人ぎと近た百家ると
そお此つらう田畑とありておのや家居の石垣とて
幸貢とてうま地とれは何とあらむとさかしきちて昌
するもてしとそ名擲破砕キておのや家居の石垣とて
人よと賣り土ハ壊ちて雪隠の壁もぬれハ山かといふ
し荒^{アラガ}陵も何とて平^{タビ}ら此田とてうまゆかしく形

といひて北^{チノク}に候^{コト}をさしゆけり別れて北^{チノク}を連れてくる
ふつは瀬とぬる飛鳥川の川末ぬる瀬武川をさしゆり小房^{コノボ}
をさしゆりて八木の札辻のやとりにつく津辻を思ひて南
八南八木とよひて高市郡北八木まで十市郡ぬる
とよむ

廿三日ゆり霧ふりし今朝二里許りほどとる(き)所も無けれハ
足も休りゆりからかきゆりハ木の町を二町とると北^{チノク}ゆき
東^{ヒガシ}を連れて那^ナをゆく耳無山ハ及の南に近くとる新賀^{ニシガ}

葛^{クサ}と竹田ぬるふ村を歴^ヒて十市郡ハぬ城上郡^{シノカミ}へ入て
泊瀬川を渡りて芝村へ出つ北^{チノク}所ハ奈良より三輪泊瀬へかよ
ふ廣きなち霧もこれ日も照さむれハまき歩^{カキ}をゆりて
よ北^{チノク}を北へゆけり著中村とふ村何^ニ著^{シノ}御墓^{ミカ}を及の左
旁^{ナリ}と大起^{オホ}て立ち孝元天皇の御むすめ倭迹^{ヤマト}日百襲^{ヒヒモ}姫^{ヒメ}
命の御墓ぬる御在所^{ミヤノ}用^{ヨウ}く前方^{シノ}まで西^ニ戌^ツ方向^{カチ}より三輪山を
背^セにゆりたる近頃木立を皆切つてて五段^イ築^キ立^ツてるさま
著^シく見ゆすて崩^クれ損^シぬる所もとるぬどりくの堀ハ

皆埋て田にありしを今くり及も御在所の後の堀の
なるやゆくよそあるをそむく遠つ御代この天皇の
の御陵をよくな混らひしくなつて慥うよその御所と云傳
へきぬるハいと稀なるを此御墓なりもそれよかして心
なき里の童も著御墓と口へ傳へてその形よく壞れも
やらひ巖もふ存りなきを今現れまき目よんあつと
と甚しく大きき美しく足りとのひて此大和の國中
よ多る御陵とものなつても此御墓よ勝るべきハいとあ
りかしくやあらむとて之をおもくれしる昼ハ人夜ハ神作りけ
むその昔まで思を出られていとかしし手裁よさばと
獨らつて猶北へゆきつて右旁に穴師神の鳥居西むきよ
立し社ハ遙く東よひつと此邊より淡谷村なる向山東北よ
近くゆれハ田の畔つゝむよ向山の前よゆく廿めりつて
後月く前方よ三段に築しそ礫を骨満き西むきの陵な
り御在所の頂廣く浅く窪く松木生を茂りし西南へけ
てハ皆切して今ハ御在所の上より北麓まで松残れり此家

の根廻り百九十二間ありと云々此堀は大方埋て田と
ありしと東後のうまにハその形も猶存りて水溜りし此陵
の東方に田家むと北、方にもとあり又三所はもと東北の高
き地トコロに鎌研カチトキとよひて後丹く前なる古家もあつた向山を
宗神天皇の山辺道、勾田上陵に充ちて説かれと田上といふ
へき地勢よりわづら景行天皇の山辺道上陵にやほらむ此陵
の北なる浪谷村の家立のまより北に出で田の畔つゝい
南別庄といふ所を猶北にゆきて向山より六町許子丑の
方よりサニサイとよふ古家ありその制ツクリは向山と同じく
碑を昔イナキとは方に向ふ脚在所の上より五尺許深さ八尺許
窪みありて松櫃生ひ茂り方々カタカタの南側ミナミに密林挑連充
ちと植て花うらけく咲く此挑つゝ翁居合ひし此家
をオシロ山といふと向へハ頭サうてオシロ山の北東方に足
申る高丸山の上の古丸城跡傳ふその城脚城臺と申しその山
を脚城山といふし傳ふといふうそおもへハ秀実の山陵志に
此陵を忍代山オシロといふハ景行天皇の脚名此遺り傳ふを

といひ、ハ既^キく強^シひたる附會^{ツケツキ}説^トハ其^レありけるを以て其^レありける
の堀西南の隅より北へめぐりて水ありて東方ハ畠と此^レをた
り西のく、南のく、^二内^一キ、小塚三つ四つと申又、この陵の北すそ
に並^レる家ともハ北別庄西方より申す家ともハ柳本にて此^レ
くともその村の領内にて山辺郡へ程近し此^レ陵を景行天皇
の御^ニ充^キき説^ハれと今、この陵の^レ所^ヲを、^レ地形他より
いと高くて岡上ともいひつゞれハ崇神天皇の山辺道^二勾岡上^一
陵^ヲならむと^レ其^レを^レおも^レとれ^レとも、^レ延喜式に山辺郡^ヲ衾田墓^ヲを
山辺道^二勾岡上^一陵^ノに兼守らしむと^レ其^レを^レ考へて^レ據考^{ヨリ}へて
も景行の陵よりハ崇神の御^ハ山辺郡^ニ近かりしと^レ著明^{アキ}な
れハ形^ヲきて、その衾田墓^ハ大和志に山辺郡の南のく、て中山
村^ヲ殿墓^トを充^キき、それ実^ニ、當^レ北^ニらハ此^レニサニザイよりハ
いと近く東北のく、たあり、^レ道^二勾岡上^一の陵^ノに兼守らし
免^レた^レし、^レ便^ニありて、^レ此^レハ此^レニサニザイハ崇神天皇の
御^ヲなり、^レ景行天皇の陵^ハ南^ニありて向^テ山^ニ形^ス、^レき、^レとも、^レお
のつ、^レ知^レられ、^レ此^レ所^{ヨリ}と^レ猶^レ北^ノのく、^レ山辺郡の北端上^ニ終

村形も王之墓もとも景行此陵も充きれと當らざるもよ
りあり猶りても足まはしれと及の間に少し隔りて
南方へものせむよといと便ありしけれとも申うひるるぬ後
此国の地図を檢るふ此柳本より北方山辺郡の内勾田とい
ふ村名もあらず道勾と云へるふ録ありけるをその東隣
けり山口村の御陵とも大塚ありと書くもあらず城知らぬ
見ざるももをりとも呼ばつるも南に降るも東方
に古家なるはら申渡谷にかへて岡嶋何れしの家にて

こゝ休ふ向山の西すそより南にゆきて後後村を東に
をれて南にゆく著上村の東をへて茅原村北邊に古家い
と多くは高宮村の素麵つく家多し此村を南にゆ
ハ三輪神の二鳥居の前に出づ鳥居を入て左の奥に若官おとし
まハ大三輪寺三重塔をとりし樓門を入てをがら殿よのつ
ねのことかろつていと厳し後よりぐれと山の麓にこのも
居神垣うらうらして社なるといふもこゝに松木の生茂
けり拜殿の前を右に出て谷川をこるる山すせのなをめぐ

跡を名付くと向ふといと心持ずけりてまづその光明院より
形をいひける御方と侍るこしよ方外の人といへと僧官の
しそしそと汚せるもの御代このすめらまは御号を
にえ知らぬいとむねぬおとろてされとそいひてせむか
うくろと云むきうせておとろてよく尋奉りてよき
下も此御寺のかいき道明上人此淨見原天皇此くま造
られし銅塔をうりせむひるむやと乞ふきといと心
持まらぬといふつに此寺の百きと知れり人ともいひ
つとて今御かすこと申付らむといへいひてとよめて
降りいづぬ二王門の内この隅といとふいひる名此華藏
塔ハ此道明の墓と云ふとてつとてまてふとく一人と
といひ夜に入て使きつた

廿四日天氣よし形とく梅心院より使僧きり人々集へて
尋めれとも猶もいひ形々の都々返事せむといふなるなり
此僧も懇よ云き、せてかへり光仁天皇の御母后此吉隠
陵ハ吉隠と萱森との畧とありと聞々をありしハ一里半

許といひたりてんまほしけれと足もつれしるよ山石
とのうて又もむちるふとよひのともて尾ぬきのよし
尾をかへりて追分とよ所よりたよこれ長谷川をさ
いりて南よゆく押坂川よそひて押坂村よつる家立此
なをもたよつて東北なる山畑のうへ後高く前低き山の
版よ陵のうへ末むきよ方に三壇よ作れり上よ御在所を
円く築たて方なる小石を段よ昔ニキカケネ疊をよとさし人段よ
冢とよふ御在所のうへ樹立生茂れ昔ハ北南面よ石擲

の口顯いよとよ安らうとく人の入るふとよかしてその
口を埋いよとて御在所のうへ五十六間陵の根廻り百三
十六間ありとよの陵頭カシラの病をよく治よりたりとて近き
村とよ参拜むもの多きよつきて陵壇のうへ御在所の
前よ諸人の手洗ふ所を構へて手水鉢るとよよのちを
居ゑよといとて舒明天皇の押坂内陵とよふとよと般へん
御母后田村皇女とよ此陵内よおそよもみ形かたちよ一し大伴皇女
鏡女王の御墓とよの近たるとよと形よとよと東を

の陵より二町許東南に女冢と申す所は半町許東北に冢
穴として岩屋に入らるる冢も傍りありてさき押坂の總堂
の上石の頸れきても百冢に傍りすべてさくらに百冢多し
所は傍りて村中に石はしきりてハ百冢の石はけり取て
ついでにハ幸しく百冢ハ少形くハ傍りてゆき傍れといひてさ
おぬかてしよその東南に女冢や鎌足のおとこの嫡室に
し鏡女王の墓東北に冢穴や欽明天皇の御むすめ大伴
皇女の御墓ならむをいふししと申すらちてさくらにハ

西下よりさくら倉橋村の出在家形をさくらとの間より山坦づ
いふゆきゆく山中に田に百冢ともあまきと申す所は二町許ゆき
て倉橋村の廣き道に出て休ふ所をさくら櫻井といふ
多武峯に登る道なるなり此休ふ家のまのさくら金福寺を
いふ教ふまに此冢の軒より西にありて倉橋川の
流るるひて右りに此冢の門築垣なるなりて民の宅と
とよましりて川べりにさくらふ菴ハ金福寺あり此菴の前
南面二三尺許なる石垣築て其上に一間半四方の護摩堂

あり此頃住持の僧も好きて人もすまびとさけの物よ
べきよひぐもあつて向むの庵を老^う婆^わうらむ出て常
峻天皇の御位牌ありまは御堂ハつらと向ハ此ちむ
うは護摩堂形御厨子のうらにれまはまはの格子
より洋らまといつまうにん奉れハ壇の中央ハ御厨子あ
り是形むその天皇の御牌のたままらまは御厨子なる
ハ此御厨子の東ハ不勤明王西ハ觀世音菩薩の木像まは
ハ前の下段ハ藥師如來の厨子といは其前ハ護摩爐あり
三方ハ壁して正面ハ格子あり此寺を倉梯宮の旧跡なりと
いふれといと信^うじ^マ地^トの形なり又ハ護摩堂を此帝
の陵そるといふ説も近ういてきつれと今よく付むんま
御陵といふべきところも好く固といふべき所もあらは其地
形もいと狭く低れ川岸して日本紀延喜式ハ倉梯岡陵と
いひ百事記ハ倉梯崗上なりとんまは合むるは合むるは
し式の文ハ無陵地と記ふれとまはとて後の世のおと地を
掘て埋奉るべくもあらはいと大なるあらはと山陵を

築奉らぬとやハハら多(き)無(陵)地と北城の地三しとりよ
こもて陵の山無(一)といへるまほひらさるをやとまこれか
北か(う)やこれ低き地なりて倉橋の岡上(を)尋奉る(た)と此(と)
ける休(ら)う家(に)帰りて廣き(る)より談峰(に)登(る)れ(ら)う大(形)
る石(と)といと多(う)所(を)さし地(を)る(た)の(岡)の上(を)とや
う形(を)丹(家)えんあげら(う)ハかの陵(を)もやると井思(と)れと
登(る)へ(き)乃(ふ)ふ(る)れ(ら)母(を)く(さ)る(と)ひ(ぬ)倉橋川
よそひて谷(を)此(を)とゆ(き)地(を)て材木(高)ふ家(多)う(と)火
よき(ら)よ(き)茶(を)ん(と)めて(る)食(ま)う(た)ふ又(す)し(地)を(て)
る根(ち)う(う)け(き)橋(を)う(う)て惣門(あり)僧坊(立つ)
た(う)猶(の)け(う)ゆ(き)て右(の)う(に)鳥居(あり)赤(く)青(く)緑(く)
り(う)廻廊(高)き(所)見(あげ)られ(ら)る(る)鎌足(の内)大臣(此)
御像(を)いつ(け)る社(を)て(し)石(の)階(を)高(く)登(り)て(る)御社
よ(ま)あ(い)と(巖)ゆ(く)饒(を)て(き)る御社(南)面(に)立(た)る(る)
西(の)う(た)いと高(から)ぬ十三(重)の塔檜(皮)して膏(き)朱(に)ぬり
て垣(を)め(ら)う(ら)き(る)大(織)冠(鎌)足(の)大臣(の)御骨(を)津(國)の

阿威墓より遷しもてきて定恵和尚の葬められつる所
て延喜の式に多武峯墓と云も載られし其塔より其
ありし頃の塔の南の一きこ下にある講堂の妙樂寺と号け
て定恵和尚の建られし遺跡あり其ありしに櫻多し
と高尾山にて寒けとははる花さけげもあしくふかくある
くはども吹風身よりそいとむしなる庄坊ももの前をへて西
山と出北の茶屋ありしより八町嶮ケルもきなるを登りて四
軒茶屋より一町をきて休ふ此所を此山の最高き所なり

けりしより山下をえおろせむ畠傍山耳無山劔池五糸野
村の丸山家るときり足もとにたんねるさき此峠をたがり
て龍ソウタイ在としよ所にて又休ふ此よりより下は此吉野郡
ありしとも猶高尾山にて吉野山の花寺をむしひし白うそ
ろろりかきしも白うそ傳々の今日にそのほとを感し
傳むる形と此家ありし猶くさしむしりて跡なる村
もて又休む所を道と云しそてるむ低ヒキき峠をさき登
りしよりて折る千俣村なる山よりそる形も因寺のこころよ

リ吉野のゆく人もあつてそぢぢふゆる山をこえて好きて
しほほどにとく上市より吉野川の北岸より立寄らるべし
尾あり今夜はあつとと思ふれどもいとはげうきくれげ
ぬる尾ともて心もとらわぬはさてしりぬ吉野川をて
舟より渡りて飯具^{イヒガシ}すたて丹治^{タニヂ}をゆくよりたれをて
とくせ七曲^{ナナカド}の坂をのほる夜はくらぐれど花のよあひと
いと白うて麓より笑ふきくればやまにあふれとてのせ
ふふやて吹きまゝの橋の下風あるしうかまうてそあられ

三町奥へゆきて勝手明神のおれよりたの谷へさうて
向きの山に登れば如意輪寺あり本堂のた旁より陵の山
上にあつて北むきより木の鳥居をて入て南のうに木
立茂れり丹波家ハ後醍醐天皇の山陵あり陵のめぐりて
六間より石の玉垣造りくらし北面より石鳥居より石の扉をきし
堅めて右左の旁より石燈籠を立しうかう北むきてれを
しきひへき御遺勅をとかしうおもむ出られて後とめ
うし御陵の西よりぬこくに正行主の毛冢とて古木の枯株^{カキヅ}

のうきりきり帝よみのあろきりり 碑銘ありし入てよの御陵
の辺に橋一ももりし寺の庭よりくもりて今ありし谷より此
乃のほとくハ橋多くてささく形くハかの栗田久盛朝臣の
御陵のほとくに千と往られくくハふちる花の名残
くちあらん本堂に入てちるハ美をく色くくくハ如意
輪観音おろくハ僧出逢て茶煮て出くハなとハ芳三亭
懐より鍵くく出て宝藏あけて何くハとんすくハ後醍醐
のこくくの自ら刻くくくくくハ即木像ハ衣冠正くくく

感もささくハおろくくいとささくハかハ橋のく多くハ所を都
くくくくく見たりくくくくくハ若くくくくハ志
北に登りくくハ長峯くくハ六田のくくくハ登りくくハ
くくくくくハくくハ一日本くくハくくハ
くくハ橋くくくハサしゆけハ所を立つたきり
銅の大鳥居のたのきけくくハ辰己屋くくハ今宵をくく
に疲れくく

廿五日そらくくハ朝のよのくくハてまら実城寺ふたつて

銅の鳥井を入て二町をりりて石階をのほれハ二王門あり
藏王堂ハ北門の背むき^{クテ}立^ル所堂の前よりぐうてこれハ
大なる堂なり^ク左の^クへ下りて実城寺に入る由主君
僧蓮藏院出きてとてなるは此山此寺とい傳へとい書
なと傳らむをんすぐくはうらひ多ひんやといハ寺に書
ふてやり此山の住人うらひよせるとして所へ葉月せ
させらるる^ク人ハ長井芳三郎となむいふまの塔
尾の御陵拜まむとて如意輪寺より藏王堂の前より二
三町奥へゆきて勝手明神のふちより左の谷へさうて
向むの山に堂れハ如意輪寺なり本堂の左旁より後の山
へのほつて北むきとまゝ木の鳥居を入て南の^クに木
立茂れる内丸家ハ後醍醐天皇の山陵あり陵のめく^ク此
六間の石の玉垣結りくらし北面より石鳥居より石の扉をきし
里りて右左の旁より石燈籠を立^ルかう北むきておえ
し^ク御遺勅なとかし^クおもむ出られて後とめ
し^ク御陵の西より^クに正行主の七家より古木の柏^{トモ}株

る誠と古し一思をくもものなりたりその上の方ある色紙
形の詩々同帝此自ら作りて自ら書つけたりなりと我
御子のすぢ誠とさるものなりしと我拜まれしと此色
紙存りハる矢せしむいところを一同帝の御研管硯ハうせ
てありし櫻形の天目墨さて此寺の開基日藏上人の木像も
いと古きいもの形もまゝ、楠の正つら主の版巻いとよ此草小札
こそたどりの系といひくきれ損ねたりたなりし主のいまはの
軍と出立むとて此御陵とまありまゝりて帰るを夫根

して歌多う付られし塔の扉名高うせよまをくももの
なりハ蠟墨とて出て懐みりすり移す多うくもあ
とととら幽うして文字のままきよくも移らひさいと
此寺の法師の板とを置て摺て、うまハいとまきれくや
又古き、曾よりひの断りたる片を古此鞍拾取とありその
外古き仏像の画まんをくらなりといふもの多うれと心とめぬす
ちなれハ皆よくもえすなりぬ午のころもなりよれと
実城寺と帰る昼のものなると取りまゝなり此寺蓮藏院此

寺に傳へりしものとしてとて出てせらるるハ統拾遺集三二

^{四五}一とら是ハ後醍醐天皇の御手ありとせ又二月會式正

頭畧縁起一また是ハ世といはれ花供懺法の縁起あり繪

と書とむけよ近世のものとして心とありぬむ大なるたんぶし

つうの芳三郎まき出きて吉水院よりせんといハいざな

とれて極く此院ハ後醍醐のこかとの土を住ませむひけ

る所なるを正平三年の火も焼きししやその代なりら

の建物ありとて柱ハ弦外をいししり彌の跡ともい

とらまきく霞さう日帝の大きしし所として上壇といと旧

むら^{シトネシキマテ}茵敷を^{ケシキ}とて谷をんねりし景色いとよし

とらまきく^{シトネシキマテ}櫻の咲くも花は^{ケシキ}わけてよや吉野のよ

し水の如きまませむひもあつるなりとせよよいとかな

しかしし院主出逢て什物もいせらる後醍醐天皇

此御手ありとてあふよのむありきそられ^{ケシキ}雲ハゆく

へししらぬなるをそすとかきく^{ケシキ}一むらさき此寺の

庄園のことかけり紛失新立巻文建武元年九月四日檢非違

使の奥書に如一乘院僧正坊長河内守正成朝臣請文を無
子細歎とかきたる事ありと桶贈中将建武のころより既に
四位よりありしありたり又宣旨案にききむひ八九通正平
六年より元中九年九月廿日尊壽丸への宣旨までありこ
の十月に後龜山にふかど此山を出家せむひしより南朝を
絶えしむるも又新葉集二より職元抄一より師元朝臣
年中行事一より記三五中録第二と巻樂の書一よりさして
ハ後醍醐天皇の御研紫石として背に焜玉の二字を彫き

り亦して作れる御文臺御研管いとよむる御とのすれなる
やまに此寺の眞遍法下大脚方にさくらひて軍せしとき
旗一をん白き生絹一幅に墨して酸漿の故をかきその
上の中上天照皇太神宮にすししてさけて勝手大明神
右にさげて春日大明神とかきしう故よりを我ら皆きれ
損れそ長さ知られず緒ハ紫草を丸に縫うりて付く
るに残れを又後村上のころの作りたりと云ふ後
醍醐天皇の御木像あり猩々の毛にて織る蓑源義経

の腹巻何くれとちまきあり又此寺の門内ニ弁慶のち
うら釘馬の足形なりといへるものも何とほれとよくもえ
さうき此寺ら出づはと西よりいつ櫻本坊よりわけハ吉
水よりふとかうしていと今よりしく造りよかふる廣き坊
て狩野山本何れしこれうしの繪うける障子をきてつけ
てうらけし此坊の什物よ醍醐の聖室僧正のものし
りし護摩刀とくやよふりよ小劔なりといへる元慶二年讃州
高篠行光と彫しといと殊勝なるものなり村上彦四郎

カ此銘くらかぬの角なるよ五本此曾塔婆を千し
て塔婆ふとに細く梵字を彫し正成贈中符の天官忠
信の甲あまの半鐸チキハ高さ三尺許ありといと矣やうなる
ものなりさて後醍醐天皇のうなるの御消息良恕親王の
書よりし藏王堂再興勸進状尊純親王の大峯藏王堂再
興縁起光廣卿の額縁起瀧本坊惺と翁の勸進状をと院
主より出て見せらる竹林院よりよへせむと芳三郎いハ
と雨しよれそ申し以て実城寺にかへる此寺も南朝の

かり宮と形しし跡より天海僧正此廣く建つぎしなり
と此より持つて入る横笛一爰笙二爰半皮の鞆なとは後
醍醐のよかとの御遊のをりく手ならしむし御物な
りといはいとゆしきれと夕くれもあつぬれハ鳴るれと
とてやどりに降りぬ今宵雨うせいと

廿六日きのふのりしはる所とさてハ宮籠大さたさるきと
んそやと思をたきてくれと雨やまげふれハ嶮ハたるハ
うでうゆむいさせきとかり合つんたるを谷間より

昔くらまのほる雲此きすすまひも雨やみげならぬ今
ぬうらきむむとさう合せて世をともと出ぬをとり日白
うんをさうし花の梢も雨風うちうすたて青葉がらぬ
りぬるとおほしなるの峯つたふ一の坂よりさうして六田より吉
野川をさうする城川ならう柳と一とあま川岸にそ
ひて西より新野越部土田檜垣とと下剗なるとふ村とす
きそりほど川中鳴るよのやうに水の上より出る岩ほど
といと免づらしき心らひ川岸より立てける岩よりと

めて皆日向さま青龍色して木目ごらうと大誠二百き
木なるの岩よなるきよるよやとおけ申東佐名傳といふ村
より宇智郡より西佐名傳をよて東阿陀といふ村して
北飯くふもよの及よすししまかへりて八田の渡よて吉野
川をまよるる行ふ人もまれなるるるるを渡守も
よる舟よをせよと大丁よよをよて川むいよよと
いらしてくるものいよらひさき童のちひさき苗を口よく
くよて吹ならしてよまきて彼方よりよなるこの岸へ引よ

る大綱りちよごりて舟をよせらかうやうなる渡舟は都よ
りよるもならよわからくよよのいよりよるものいよらむ心
していとよし渡をよ右よゆけはよの田むら又すしし西
南よゆきて南阿陀よまぬ大冢山いづれよと同よて北村の
南方よいと高うらぬ山腹よ大冢よて小まよるる家あよ
なむよにけりといは今むらきよる山畑をのけりてんるよ
もと生茂りて後田く前かよて未申のよむきよる内き
よの頂登り石擲壞北て石二つをう頭北てんぬ家のすを

ちまぐらうてしるふ百九歩許あるいと大きき山にいらぬ家を
なまかうハよらむとしようしおは天和志上藤原良継の塚
太政大臣此阿阨墓に充き家なり此山を西に拓りて
すし掛けの瀧村たし川をさうりて猶ゆきゆく吉野
川の兩岸のいとほどもいと然りしき所をかたきともお船
くも山のこまつらなうて世をなれり心ちげゆけとも
く人きより逢を両きぬりまありていともひし
くほどほし嶋野村を家すしけり此村すきて岩の

をよまきつゝいさぶうて川をにむあうてまき吉野川を
さう渡舟かの八田の渡のおと細むきとへこれと渡守ハな
し向うの岸も人けなき山るれハ童きと出くべもあらは
いうせましとらひありさそもかの八田にて童がせりや
うまわい心とむとて皆舟に乗るるへ細引きく
あらむ思ひも似を心中すて向の岸につまぬ
舟より拓りて無山を踏らるる跡のまじくたへ登りて
西よふれハ彼方へなごるとえり吉野川のちやうわ

う木る及まを流きつるいとおもひのけつなりや川岸の
山坦つゝて栄山寺よきぬ名高うきつる寺の
思もつけいづおせき山すそふ荒もそつ門築垣形もな
いとまきくあらぬハ角門堂まあるれこまの形し立
よりんれハかつちも大さも奥福寺ある南門堂こ同き
まして柱も扉もおもとの格子もいとつて利を換ねき
豊成右大臣此建多ひしき形うといへるけこまの
ぬへしおもとつてし各沈ちの鏡もよの旁形鐘樓

かうて道風朝臣のかれしし銘文の字ハさびもなす
北まがけきり摺こく人多き形へしよ門堂の北後をす
なまち栄山高くそをる南たもてハ吉野川おもひし流
りおもてハいちやくとまもちわらで流つる川の此寺の前
きてハ音ふる多ては水の心もいとのとまよりゆる音無川と
つてハふもさるふとまもちあやしくすけし茶所こま
まもるる庭ふけておもに古き家やあま問へハ
武智丸の御墓ひらふよ北の山此奥に傳れハ及し入す

る人なるといふていままじとて畑つくれどものかさ
ひてえさせん地をのこすと持てて丹堂の西旁に好る御天社
のたより石のやうにもあらぬ所をのほりて地をさへ
りてやつといふ一年のうの山を壺はくしつしおと付
りなるといふれはそとともえさすす峯ちううのぼりて
すらしくばうれは所よりてきんおよりてこれハ壺のあ
らて一尺七寸許の四角なるもの内をまろに窪めしもの
二つ並ひて土中より顯れし好る練石をれはいろ一を角
くすけてさううハ両方つきてさううくすけえあらじ蓋も
あつれと堀出しさううにせらるまぬなとよふよふ是とさ
るべき云達の骨を納めし石横をくし峯に登りて尾つ
くは北へゆきて北なる峯の上と西東三乃北南二間をの
り方^{ケタ}の高さ二尺許の石垣築してさうう上といとあさきく
今りきりる碑石南むきてまうす所よりてきて是をむ武
智麻呂云の御墓と傳ふこふおもむしかけばいと今やうを
御墓ともあらじ猶ふのううと土の高くあらう半る古家

ハナリきうと問へとさう所此山よりきたらに傳らぬといへとい
うふせむ此石碑何事う彫きらむとみらるに當寺本願
南家始祖贈大政大臣正一位武智麻呂の尊儀と見え石の
背に天平九丁世年七月十九日薨御元禄六 癸酉年四月日
文珠院法印栄菴再興之と彫付しう此所まふとて此
公此墓ならむと云ふ栄菴が再興すと彫つていかり平一
きうしよとやらむいいうらむ此山を東へ尾つてい
ゆる北麓をとりぬるはう家立あるはとて二つとて

百家人事あれやそ形らむとてと多武峯畧記にハ栄山墓
とて記せぬハ猶よの山のうちをうてハとてものせむをうぬ東
へ折るまを所を畑山といふ小嶋村の内をうとて宇智川をこ
いりて吉野川をたよとて今井湊惠なといふ村をへて五条
といふ里よまの此山といふ山もすしハ遠のまて田づら廣う
菜の花ききつてきしけししたなと此日ある山里をのりま
うじしよの都へ出たらむやうよそおぼゆるよ今夜ハ
らぬ町にやういふつ雨とてやういふまにたぐれよは

とありといは井上皇后の宇智陵尋むとて出ゆく地所を
左へ出て吉野川の川原をゆく地所を
うて水ハあたるの岸根をそなたの板橋をうて野原
村はそよ川をうて又吉野川の岸へ出つ川をそひて
ゆけ丹生川の落合をうてまぬの落あふ丹生川の
南岸と北岸と木深く茂れ森あり南あふ御所の
宮北あふ若宮におもき川端より左へすし登れ
ハ東むき鳥井ありといふの内社とありまふ中

央の東面^年あり御社ハ井上皇后北脇の南面^年にまふ早
良親王南脇の北面^年あり他戸親王北御所におもき
地ありハ美安寺村といふも川の端にありて丹生川の板
橋を西きまにうて川をうてそよの橋板のいふとつ
なぎとてう渡すとすし登れハ御山^{ヤマ}村地家まを西
北へ出るとなれて又高き地のぼりて猶ゆく一字をサイ
野とてまふなるむらき荒野の松一むら茂れ中へ
御廟^{ミヤ}家とて丹生古家ありとて堀のあととて

形も池を有る菜更木村をへて天野川を渡り北川と小山
田川と狭山地に流入る川あり岩室山も新田大野新田左
とふ村すまて福町八いと長し草尾新田関新田野尻村ふ
とすくれ八和泉国あり東村金ノ口赤畑ちもて大せん
陵の東方を北へめぐりて山陵の後のうらまの中の堤に入
れハすなもち番所きちし是ハもと御陵の上より一
をいし年竊りて歎申つるいあまてあまかうあらし
移されしといふれし堤をすらし東へ山け八番小屋昔の

まうてありきちもこの御陵ハ十年許さきも拜し
一に本深くかうしう茂れ御陵なり一は今ハさまか
らうて目よきも木まもなく切つてきりきり白鳥と
とのむまもく集りるるそ昔んしもかこらぬや山陵の作
さぬ例のやうに三段に築あげて御在所ハ州にて頂より石懸れ
まうと方きたに築出て未方むきし周の堀ハ水よく湛へ
て堤より古松立ちあらひその外のみぐりも又から堀あり南
方よりその外も又う堀ありて堀三重あり外堤千二百

八十三間なり此堤九百五十九間めぐるは里御陵の山乃根ま
りり七百六十三間御在所の峯の高さ十六間四尺まこれ峯の
高さ十四間中間の低き所の高さ十間五尺ありとそあれ仁徳
天皇此百舌鳥耳原中陵あり甚しう大起ある山陵なりハ
大山陵と里人の申ならんきるもけさるもそがし四辺
に大きき小なき家山九つ許あり大う山陵のあり中
あめ山陵とあめ南陵と河内国なる磐田山陵 根廻り七
百七十七間
うらばほきなるあらび此他ホカも大きなるも三百間四百間

あまうとすとくそあらぬめぐるしくふ八つありより風を
しく吹ていどうさむきふ日とくれちううなるもくれ
ハ中筋村より界の大オホセウチ路に入て薩摩屋とやとらぬあ大
小路より十町西東とほりて南ハ和泉国北ハ摂津国とて
国界なりととむ

廿八日天気よし今般と風いと寒し大せうちを東に出て
南へゆく大山陵より十町ふあり未申のころ上石津村領此
うらう字とサニサイとよふ陵と履中天皇の百舌鳥耳原

南陵形り御在所内くま^{ケタ}方^{ケタ}三段^{ケタ}築きて未方^{ケタ}向ふ
陵山の根廻り六百三十六間御在所の峯北高さ十六間頂上
より四間許深さ七尺余り窪み前の峯高さ十四間四周の
堀といと廣くて堤ハ八百八十三間ありとるむ陵上ともろく
は松木きちすへてハ小さく柏木生ひくともろのなまかへ
りて大山陵より六町はかり成亥のうへ中筋村の領に田出
井山ともふ陵ありおは及正天皇の百舌鳥耳原北陵形り
御在所内くま^{ケタ}方^{ケタ}三段^{ケタ}築き未方むきく^{ケタ}陵の根

廻り二百三十間御在所の頂より五間半をく^{ケタ}深さを
間余り窪みありともそ陵山松木茂りめぐるの堀に水港へ
きく東南の旁に田き家あり東北の旁に方遠宮とい
ふ社あり田屋を西北へゆきく^{ケタ}大和川の南岸を廣き
及^{ケタ}出で大和橋をく^{ケタ}大坂より紀伊国よか^{ケタ}
大なるれハ往來の人いともく^{ケタ}安立^{アキラカ}所をく^{ケタ}住吉の
松原いともろし高燈籠ハ松のなりに高く立ちく^{ケタ}御社を
拜くともく^{ケタ}住吉新^{ニシ}家^ケ天下^テ茶^カ屋なるとすきく^{ケタ}地

行及の東形の手塚山とて茶店を構へていとか
ありし今宮新家にて昼げもの今宮あをて長所^{ナカミチ}
に入れハ乞食のあまゝ住しつゝいともろし此所より大坂と
はよりゑん頓堀とてせく賑をくたふといへいある
形う所を北へ向けて大川の南の岸形葉地とて
る此大坂とて親し友うりし待よりこ
ひてある酒とてひてやうにうてぬ
ハ九日せらすしとていと寒く六勝尾寺の御陵

ちとまむとて出る天神橋を北へ向けて東天満の町
を越えて北長柄とて所よきぬむし形うらの橋
もあらね舟とてそらる濱やくし堂因嶋の出在家
なるて崇禎寺の松林とて休ふ櫻の花さきれり
るもりてし蒲田の茶屋十八条とて所すきて神崎
川とてしつと小曾根^{コソネ}の渡とていふ廣芝小曾根をて
松の並木のなつとて寺内^{テウチ}とて村とて在り
うた見て並松の中を行すれハ山路とて山田の下新田

すきそ低き山に此山間をうらむくくをくくとめぐるゆくと
見おもなくいとうていこうなる山田の上新田茶屋あれ
はまゝ休むふの及いと若くゆきよくし猶山屋をめ
ぐるゆきそすしうれに今宮といふ村よりあつて
又休まかれいむふはと一雨よりきぬあつて勝尾寺
までいらくらうと向ふ五十所傳うといふいとむし
くれといふハせむ雨衣うちきてまゝ山路よる外院とい
山里をゆつて山坂をのぼるこの登るはいと細うそらハいとく

らうて雨のこふりまきるるよ(廿)里人きよけあをで心あ
てふ分あし山ハ皆そつひよなれどもいづれもてらハ猶とえ
以昔一見あを眼をしきうると赤念して猶のぼりく
てそらうとをいれハこのむいふの山ハ坊どもまつきて櫻
の花もきれいれいりかうかき若う登りきつる山を人すし
ふづつて二王門あり寺ハこの門を入てまゝ山にゆけりなり
なりいと昔一けれハ此門の右旁あり一つ屋に休ふ此家あ
るじかさらひ出て無山なる御陵ハいづくはうそ猶のぼる

べきなりりと向へい形登り夕ふ及上付らひおよう一町
許東方は郡山へおき及よりサた入き所は付くと
いへばいともれもて甚く行つれしるは寺へハ
のほらしてあをなむとて茶の息つくさてもあまて
登りなつら世寺へぬもちちてして大夫のま登りぬ
ふやとてちりてまうりきていもてうんくしよ
堂まで海のおもてもとれ詠めやらねてちりしき
なり形とあつらふにゆひもぬもつらちちてお

の尾を出て諸共は御陵へまわつかのほしといひつる
うよ一町をう東へゆきて郡山へおき及と穴生寺へ
く及とわつら及のお形くの左旁は阿闍梨觀蓮墓
所と彫りて小なき左石はさうさし左へ入りてお高
き山すそを登りて南面へ高さ六尺許ぬる七重の石塔その
東へ並むて四尺許の高さぬる石の宝篋印塔あり前の
ハ石垣築あけ後のう三面よも三尺許なる小溝を堀り
りぬ溝ハ元禄十二年に公より堀りちりし堀切あり

七重塔の臺石に文字ありき。彫付されども經文ありや銘
文ありや文字刻^{キレ}て讀見へくもあらん。兩^ニどもあらざらま
しうを措^ク字してしよとて足^レてま^レとてかやと形^ク降^リされハ
い^ハせむくそとく^ハ此^ノ所^ヲを光明院此^ノ御陵^トと元祿に
定められしれと此^ノ帝^ノの御^ノ叱^ト藏人^トを親^シく仕奉^リ
菅原秀長^ノの康曆二年の日記ま^ニ皇^ノ年代私記^トを
ハ大和国長谷寺の御^ノ菴^トを^ハ萌^ル御^ノ由^ニ足^レるもと元
祿の度^ニま^ニ銘^ノ運^ノ録^ノの文^ノに^ハ是^レを^ハ此^ノ勝^ノ尾^ノ寺^ニ定め
られしといとらちて^ハ前^ノ王^ノ廟^ノ陵^ノ記^ト及^ハ山^ノ閑^ノ語^ノ形^トに記
せ^ル趣^トを^ハ此^ノ御^ノ陵^ノ所^ヲま^ニ疑^ハむ^ニあり^ハ以^テ今^ニ
ハ御^ノ陵^ノの前^ノなる^ニ立^テ石^ト阿^ノ爾^ノ梨^ノ觀^ノ蓮^ノ墓^ノ所^トあり^ハ據^ルと
し^ハ此^ノ陵^トとせ^ル石^ノ塔^ハ觀^ノ蓮^ノの墓^トなる^ハお^トい^ハい^ハい^ハぶ
うし^ハお^トい^ハけ^ハハ^ハ大^ノ夫^ノの^ノま^ニう^ニあ^ニづ^キを^ハう^ニめ^レく^ハ兩^ノ
し^ハと^レて^ハ立^テ石^ノの^ノま^ニい^ハづ^レバ^ハこ^トり^ハし^ハと^レい^ハし^ハ今^ニ
の^ノ茶^ノを^ハそ^レう^ニら^ニむ^ハお^トき^ハら^ニる^ハこと^ハも^ハ形^ノを^ハ諸^ノ共^ト
あら^ハし^ハの^ノ興^トを^ハお^トの^ノせ^レら^レて^ハ山^ノ路^ヲを^ハく^ニる^ハふ^ニら^ニ水

まき北のや谷川のおとがしうまきくまのゆ粟生の奥村
なる村宿久庄なるといふ山里を七十余所をうらむれば
郡山とゆふとらうこまぬ雨やまびふれはあまやうぬ
四月朔日けし雨うらむ郡山を出て中河原川をうらうて耳
原めの家といふ百墳の前をへて十日市川原所処どて
阿威川をわたり三嶋の藍野といふまじの地近きうらう
まやあらむいふハ何村ぞと問ハハおほまじ村と傳うといらふ
る声ヲホドう男大迹といふといちかくうよひてたふる継

休天皇此大御名故地名よりけて呼まれヨコナマが訛りなるうら
し傳うるきうふあらさる、此村の家並すぎてり及の
たのこくに茶臼山とも陵ともいふ古家ハ继体天皇の三嶋
藍野陵なる御在所ハ内々前ケタの方ざぬまうて己午の方
し向ふ松生を茂りて根廻り三百五十間御在所の頂アキ登けて
大石五ツ顯出しうとそりうらの堀廣く水湛へう北のこ
東の方し円き小冢五つり東北の堀の外例いま里人の墓
地となる南の堀の外岸ム小社立りやう南此廣き及

と主双へる家ともハ夙村あり址ついで鎌足の大臣此
舊墓をも見えやとおもひて田作れる翁ととてあり
よりの遙く西へもとて北へものしりふき所と傳り
といへばちゆへんありぬ宮田羽室郡家の新町をどる
て又川をうらり又川といふ里ハ町家立つきく天神の馬場
真砂マナゴをへて高槻の城を右よりゆく安満の新町下村
丹波谷梶原櫻井かうなる廣瀬なと行すくして水無瀬
川をうらり昔ハ園戸院山城攝津国の界なりとを今と

ふらむせ川国界なりとそ山崎此町いと長し離官八まん官
の前をへて猶らの町をゆく繪檜もくハさるものにて
はら饒をうら今ハうら家もなし午のころも形ありぬ
まは此町をかれいむふ五位川をうらりて少しありゆ
めハ円明寺村ありり及のたのうら一きと高札行敷あり
り此ころ西東一町余のほど字を葛原カヅラハラとふ此藪ハ今よ
り三百年許あり古家の土をうらりて開きく跡を藪
のうちに開き残る所ありて木立生むるさし人親王

冢とよふ山北葛原親王の御墓ありとをよの竹藪より一
町許西方よりカヅラ原とよふ藪の片よものよりまき木と
も生ひしる所あり古松のもとに葛原親王の御冥を
祠なる小社ありよの親王を火葬奉りし跡ありとよふ
平地より墓のうしろなるもとのより出てすけりゆけ
は小倉社の一鳥居の前よりきぬ月明寺川の橋をこりて
て調子村神足^{カウチリカイヂン}開田の町をへてたまりて小畑^{コバタ}川の橋を
りりり向日^{ムカフ}町へ入りよのなるこり少し登りしころを今

小嶋町といふ昔の嶋坂のちとるうとそ向日社の石北鳥井
の前より休む土川すきそ久せよて長た土橋をこりて
北川を桂川の川志もるる石原北茶屋吉祥院の出戸
ちこてまき橋をこりてよは紙屋川と鳴籠川と落合
て流る川なり四冢よりまた休む東寺のなる城
とほりて八条より大官^{オウカン}のけりて北へ東へ大路小路
ちゆきゆりり西よりいつれは足をそろりて西替町に
り家より帰るちのこ子も女子も待よらとめてぬる

く酒をとものひろほとに雨きやうよふれとさへーこあ
らぬを大夫まもうられぬいとくさくーこ人いあし
ふづをぬれど

えさぬれふさや 御陵の

あしやゆれし 菊並此

ーくさくさ

種案

